

TOTO 通信

2024年夏号

Toward a Creative
Architectural
Scene

光の ディテール 特集

Special Feature More Light



光 の デ イ テ ー ル

特集

Special
Feature
More Light

| | |
|------------------------------------|------------------------|
| インタビュー | 4 |
| 手嶋保の光 | 手嶋 保 |
| ケーススタディ1／「横浜の家」 | 10 |
| 時を刻む 円形の光 | 手嶋 保 |
| ケーススタディ2／「小金井の住宅」 | 18 |
| ルーバーからの光が 居場所をつくる | 若原一貴 |
| ケーススタディ3／「膜屋根のいえ」 | 26 |
| 天気を映す 雲のような天井 | 永山祐子 |
| ケーススタディ4／「光のあみの家」 | 34 |
| 光を集めてととのえる 空気の部屋 | 今村水紀＋ 篠原 勲＋ 河合伸昂 |
| シリーズ | |
| 古写真でみる建築家のアトリエ7 | 42 |
| エーロ・サーリネン 文／山村 健 | |
| 現代住宅併走58 | 44 |
| 「栗津邸」 設計／原 広司 文／藤森照信 | |
| 最新水まわり物語65 | 50 |
| 麻布台ヒルズ | |
| TOTOギャラリー・間で展覧会をします | 56 |
| 大西麻貴＋百田有希 / o+h展 | |
| News File | 58 |
| TOTO News, Cera Trading News, Book | |

「TOTO通信」はインターネットでもご覧いただけます。

🔍 <https://jp.toto.com/pages/knowledge/useful/tototsushin/>



表紙／「横浜の家」の3階。撮影／傍島利浩
編集制作／伏見編集室 デザイン／岡本一宜デザイン事務所
印刷／ゼネラルアサヒ

場所をつくるが、
光がなければ、
その場所は見えない。

建築は

しかし逆に、その光がどのように入ってくるのかは、むしろ建築が決めている。
つまり自らの有り様を決めるものを、先手を打って逆に自ら決める手法。

建築がどのように見えるかは光によって決まるとも言える。

その光の道筋はどのようなデテールによって決まっているのか。

不定形な光をコントロールする形とは。

閉ざされた空間を照らす光明。



2009

堀切の家

トップライトの光が可動式のリフレクターに反射し、羽重ね張りの壁へと伝う。

手嶋保の光

インタビュー

特集／光のディテール



2012

上落合の家

photo by Nishikawa Masao

3



2019

菊坂の家

photo by Kusunose Tomoyuki

4



2019

小石川の家

photo by Kusunose Tomoyuki

5



2018

船橋の家

photo by Kusunose Tomoyuki

1

建築にはかならず
光を取り入れるための開口が存在する。
光がふさわしいかを考えぬき、
開口部のディテールを設計していく。
これまで数々の建築作品において、
多彩な光を実現してきた建築家・手嶋保さん。
その光のディテールを振り返りながら、
空間と光の根源的な関係について話を聞いた。

インタビュー／手嶋保

聞き手／伏見唯
まとめ／植林麻衣



2014

大磯の家

photo by Nishikawa Masao

4

2

2012

伊部の家

- ❶ 型ガラスのハイサイドライトから洗い出しコンクリート壁へ光が落ちる。
- ❷ ハの字のルーバー付きトップライト。
- ❸ 光を透過させる4mm厚のルーバー付きトップライト。
- ❹ 光量を抑えた空間にトップライトと格子窓からの光。
- ❺ バタフライ屋根の頂部にトップライトとルーバーを設けた。
- ❻ 左右のトップライトからリフレクターを介して中央のヴォールト天井に光が反射する。

❻

photo by Nishikawa Masao

空間は光が生んだ成果物

——光は建築にとって根源的な課題ですが、手嶋さんは作品ごとに異なる手法で光を扱うディテールに取り組まれています。まずは、光に対する向きあい方についてお聞かせください。

手嶋 吉村順三さんのもとで修行したのちに独立したのですが、どのように建築をつくればよいのか模索を続けていました。自分ができることは、何なのか。その道標が「光」でした。

きっかけは「茅ヶ崎の家」(2007)で建主から受けた、トップライトがほしいという要望でした。比較的立て込んだ住宅地で、北・南・西は隣家と近接しているため、確かに上から光を取り入れることは有効です。とはいえ、トップライトの採用には、直射日光のきつさや紫外線による影響などの懸念もありました。

そこでルーバーや、光を反射させて取り入れるリフレクターを用いることで直射光をやわらげる工夫ができないか、と考えたのです。

——都市文脈を読み解くところから、光の探究が始まったのですね。

手嶋 竣工後は、光の豊かな表情により、屋内で充足感を得られることを体感しました。一日のなかのうつろいや四季に応じて、新鮮な感覚をもたしらしてくれる。光は空間の本質であることに、あらためて気づかされたのです。

「光」は建築家なら誰しも取り組むことで、空間に感動をもたらします。ただし自分が心を動かされるのは、直接入ってくる鮮烈な光そのものではなく、物質に「反射」することによって得られる空間のように思います。

——反射する素材の色みや質感によって、空間の表情も変わってきますね。
手嶋 光は、空間を生まれ変わらせると思っています。空間は、光によって生まれた成果物ともいえるかもしれません。植物も光を受けてどんどん成長しますが、その変化する姿は予想外なことも多く、感動的ですよ。そんな関係性を、光と空間に見出しています。

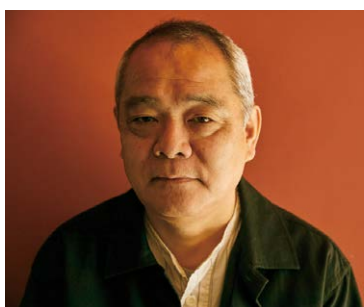


photo by Yamauchi Hideki

Teshima Tamotsu

光を透かし反射させる ルーバーとリフレクター

——まずはルーバーについて実作をもとにうかがいたいと思います。「上落合の家」(12)は「茅ヶ崎の家」で採用されたトップライトとルーバーを展開させていますね。

手嶋 厚さ4mmの板を加工したルーバーですが、薄いので光が透過するんです。石でも光を透過させて異なる表情を見せるものがあるでしょう。木で透かしてもきれいなのではないか、と思ったのです。

——「大磯の家」(14)はトップライトに、ハの字形に取り付けた厚さ5・5mmのシナベニヤのルーバーを設けています。

光そのものでなく
光が物質に
反射するときに
生まれる空間が
私たちに
感動をもたらす。

手嶋 断面で見るとハの字形のラップ状態になっているので、狭いところと広いところとで、通過した光の照度が異なりムラが生まれるのです。明るさのなかにもグラデーションが生まれ、均質ではない光の心地よさを感じられる。この住宅ではトップライト直下の壁一面に書棚を設けたので、直射日光を本に当てないことを念頭に置きました。

「小石川の家」(19)はルーバーの流れでいえばこの「大磯の家」の延長線上にあります。バタフライ屋根の頂部にトップライトとルーバーを設けているので、こちらは光が落ちる空間にボリュームがありますね。

——光を反射させるリフレクターも使われていますね。「堀切の家」(09)では、トップライトからリフレクターを介して間接的に光を取り込み、さらにその光が壁と一体になったベンチに伝え落ちています。羽重ね張りのベンチの背もたれに影が生まれるコントラストもいいですね。

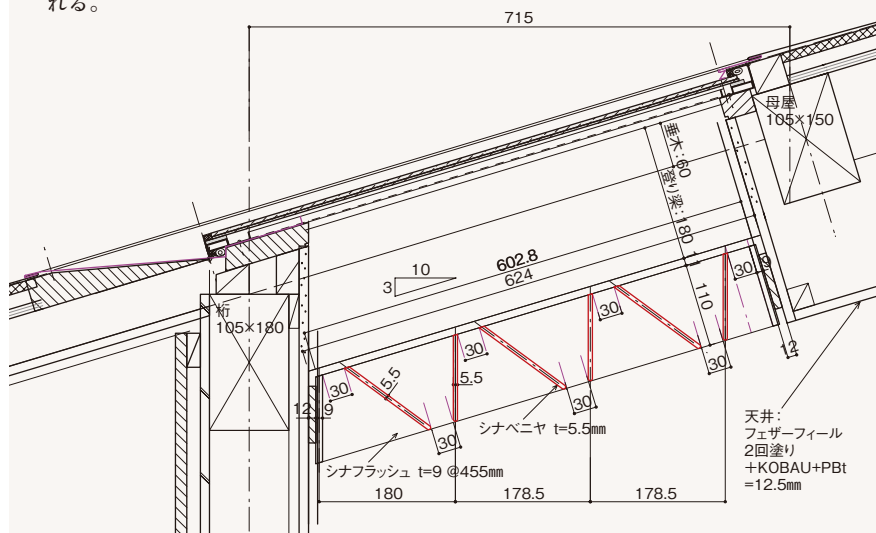
手嶋 3枚のリフレクターは中心に軸を設けた可動式で、直射光が強い夏は閉じることができます。このときは、原寸図を描きました。無垢材でつくろうとしたら重かったなので、家具屋さんにシナベニヤで内部を中空にして制作してもらい、非常に軽い仕上がりになりました。

大磯の家（４ページ②）／断面詳細図

5.5mm厚のシナベニヤ製
ハの字形のルーバー。
ハの字形状により光に
グラデーションが生ま
れる。

0 5 10cm

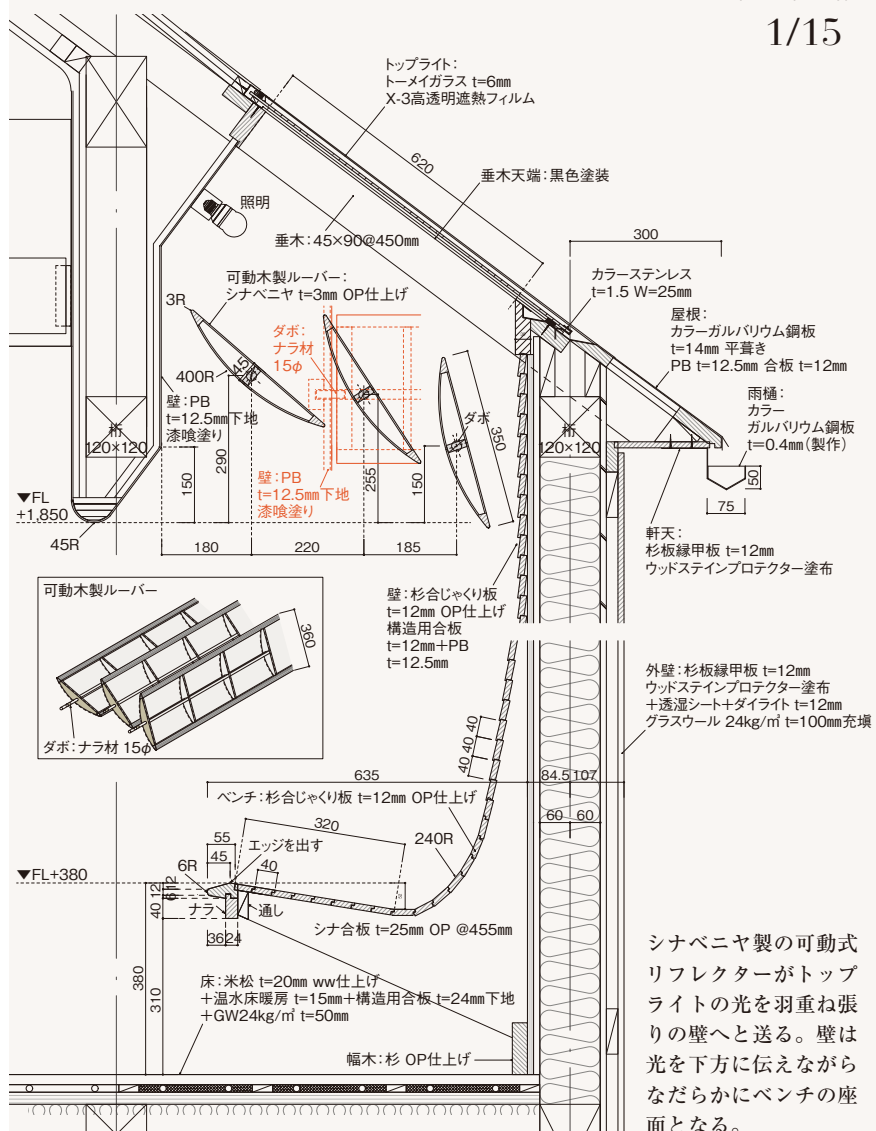
1/10



堀切の家（３ページ写真）／断面詳細図

0 10 20cm

1/15



茅ヶ崎の家

光を意識するきっかけ
となった作品。光をや
わらげるためルーバー
やリフレクターを採用
(写真左上)。

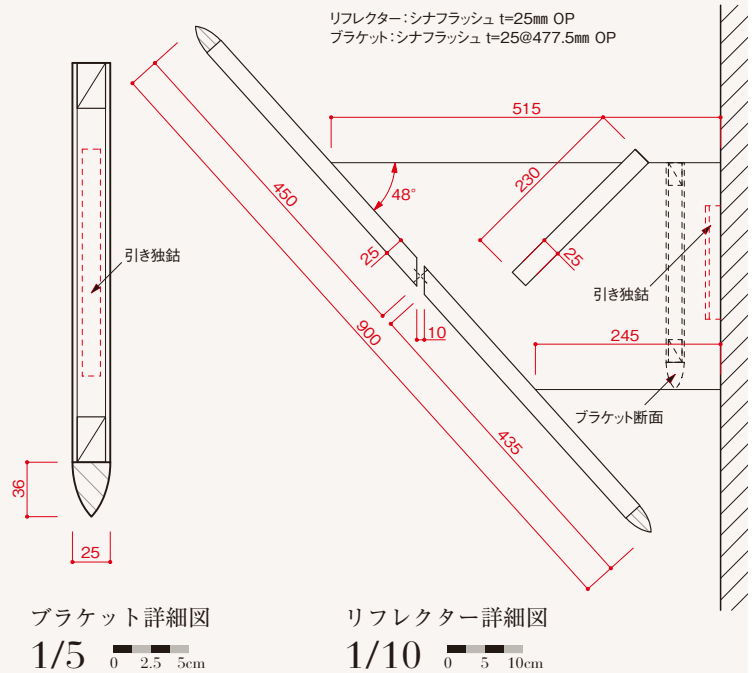
photo by Nishikawa Masao

——リフレクターによる反射は、「伊部の家」(12)でも展開されています。東西の間口に対して南北に奥行きがある形状で、東西端部のトップライトから注ぐ光が木製のリフレクターを介して、ヴォールト天井に反射しています。曲面は光を奥へ届けますね。

手嶋 備前焼の中心地でもある土地に立つ陶芸家の自邸兼工房なので、土地に宿る記憶や住まい手の生業を考えました。ヴォールト天井は窯から想起したもので、住まい手の仕事や暮らしぶりを描き起こすように設計した結果でもあります。

——リフレクターの端部にはテーパーが付けられていますね。先が尖った楕円状にするなど、執念を思わせる細かいつくり込みをされています。

シナベニヤ製の可動式
リフレクターがトップ
ライトの光を羽重ね張
りの壁へと送る。壁は
光を下方に伝えながら
なだらかにベンチの座
面となる。



↑シナフラッシュのリフレクター。斜めのスリットと端部の形状が特徴的。

→トップライトとリフレクター。反射した光は中央のヴォールト天井に運ばれる。



photo by Nishikawa Masao

型ガラス（4 ページ①）

「船橋の家」のハイサイドライトに使用した型ガラスのサンプル。大小の凹凸があり視線をさえぎりつつ光をやわらげる。



photo by Yamauchi Hideki

手嶋 住まい手にとっては暮らしと仕事が不可分であり、また創作に打ち込めるように、光により内省的な空間をつくろうと心がけました。バットレスに支えられたシナフラッシュのリフレクターは、面をきれいにさせるように斜めにスリットを入れていきます。端部は、丸でも三角形でも美しくならないので、このような形を考案しました。

リフレクターをシャープに見せつつ、手が触れる手すりはなめらかな半円状にしています。ただ、こうした形を生み出した理由はあるものの、やはり自分のなかには合理性や整合性だけでは語りきれないものがあり、最近、それがよいと思うようになりました(笑)。

光を顕在化させる
 テクスチャとコントラスト

——「船橋の家」(18)の側廊のハイサイドライトも特徴的です。型ガラスから入ってきた光が、洗い出しのコンクリートや漆喰の壁を伝って落ちてきています。

手嶋 洗い出しの面が光って見えて、独特の表情となるのですよね。ここはコートハウスで、隣家から庭が見えないように側廊を高く立ち上げました。ただし側廊に光は取り入れたく、一方でハイサイドライト越しの視線も防ぎたい。そのために大小の凹凸がちりばめられた型ガラスを用いました。個性的な柄なので近くで見ると戸惑いますが、高い場所に設けているので気にならず、また光の表情もよい意味でのあいまいさが生まれる。複数のサンプルを見て難しい柄を選ぶようにしました。結果が予想しきれないことを楽しめるような自分があるんです。

——光と影のコントラストも印象的です。たとえばRC造の「菊坂の家」(19)では全体の光量を抑えながら、四層の吹抜け上に設けたトップライト

から光が入り、各フロアでさまざまな表情をみせている。

手嶋 住まいは明るくなければいけない、という先入観が定着しています。が、心地よい暗さというものもあるのです。それは私の原体験に根ざしているのかもしれませんが。子どもの頃は福岡郊外の、江戸末期か明治時代に建てられた民家で育ったのですが、屋内はほの暗く、そのぶん、遊び場で野山の情景や植物の存在を鮮やかに感じられたものです。そのような光や自然との関係性が、建築のつくり方にも影響を及ぼしているのかもしれない。

建築と人間の関係を描き出す光

—— 光についてのさまざまなディテールをうかがいましたが、一貫した秩序のようなものはあるのでしょうか。

手嶋 光にどのように形を与えるか。まずは何らかの合理性や物事を整理するうえで、理性をたよりに考えたいと思っています。フォトジェニッくな演出だけで終わらせるのではなく、機能や目的が最優先されるべきですが、意図がストレートに見えてもおもしろくないし、住まい手のためには空間の美しさも重んじられなければいけない。光の扱いに通底するものがあるとすれば、空間に豊かさをもたらすため、ということでしょうか。

—— 同じ方向性のディテールを錬磨させていくだけでなく、次々と新しい試みをされていますね。

手嶋 それぞれの建物の条件、そして施工者の技量や私自身のコンディションも含めて、物件ごとに異なるのはもちろん、昨日と今日でだって変わってくる。そのなかで最大限がんばって生まれた、という形が望ましい。最近はそのことを楽しむようになりました。決めているはずなのに決めきれない、という状態——ある意味、「成った形」というものが好ましいと思うのです。

ですのでディテールも毎回、新たな挑戦をしたい。ディテールはあくま

photo by Yamauchi Hideki



Teshima Tamotsu

で諸条件から生まれる結果であり、目的でも正解でもないのです。こういうと語弊があるかもしれませんが、やはり失敗することが一番勉強になるのですよね。住まい手への責任を担保することは大前提として、前進していきたい。そのような試みのなかから、澄み渡り、古びないものをつくっていければ、と思っています。

—— 最近、どのようなことに挑戦したいと思っていますか。

手嶋 16年にインドに行き、フマーユーン廟の石をくり抜いた格子には感銘を受けました。またル・コルビュジェのインドでの仕事も刺激的でしたね。光の扱いでいえば、彼がヨーロッパで手がけた建築よりも素直に理解できました。

—— インドでの体験は「横浜の家」(24年、10頁17ページ)に通じるものがあるように思います。これまでの取り組みが結実すると同時に、新たな境地を開いた印象を受けました。

空間に豊かさを
もたらすため
光にどのような
形を与えるか
それが
光のディテール。

たとえば宗教建築はその代表です。しかし実際にそうした空間に身を置いてみれば、じつに心が安らぐのですね。ある意味、膨大な時間をかけて「成った形」とでもいべきか……。古典的な形ではありますが、自分にとっては新しい試みです。

いずれにせよ大切にしたいのは、そこに「自分がいる」という感覚です。それが建築の根本であり、そのような感覚を得られる空間をつくりたい。そのためにも、光はなくてはならないものだと思うのです。

手嶋 保

Teshima Tamotsu

てしま・たもつ／1963年福岡県生まれ。
86年東和大学工学部建設工学科卒業。90年
97年吉村順三設計事務所。98年手嶋保建築
事務所設立。おもな作品Ⅱ「三秋ホール」(2
016)、「道灌山の家」(06)、「十条の家」(00)。

Check!



手嶋保さんの
光を紹介する動画を
ご覧いただけます

<https://jp.toto.com/tototsushin>

時を刻む円形の光

作品

横浜の家

設計

手嶋保

宗教建築の空間に身を置いてみたとき、

なんともいえない心の安らぎを覚えることがある。

「横浜の家」は、そうした空間性をもった住宅だ。

さまざまな表情をつけたコンクリートの表面を、
四方から降り注ぐ光が伝い、円形に天井を照らす。

住まい手が光を手がかりに

自分の居場所を確認できる家。

Special Feature
More Light

Case Study

01

House in Yokohama

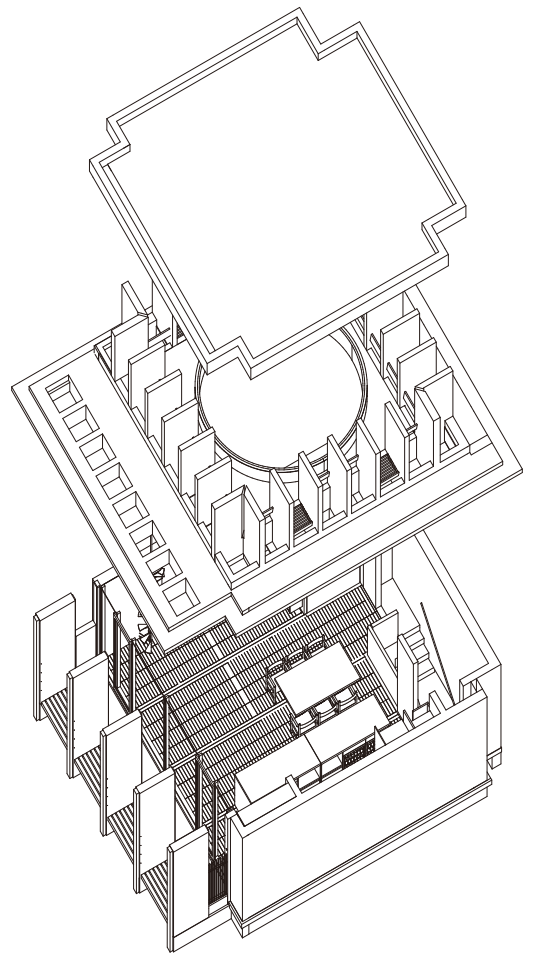
3階リビング。四方のハイサイドライトから天井に広がった光が円形に切り取られる。

手嶋保さんが設計した「横浜の家」は、横浜駅から20分ほど歩いた住宅街にある。施主は福祉や飲食など、さまざまな事業を手掛ける40代の実業家で、妻と3人の子どもがこの家の住まい手だ。手嶋さんが登壇した講演会がきっかけで、土地探しから設計の相談を受けた。当初は別の場所も検討したが、高校の同級生だという夫妻がともに慣れ親しんだ地元の土地に決まった。敷地の大きさは、間口10m、奥行き20mほど。南側には広々とした公園があり、樺の原木が何本か植わっている。北側は10mほどの崖がせまり、その上に道路が走る。周囲には、3〜4階建てのアパートや住宅が立っている。

公園とパラッツォ

「横浜の家」は、まだ工事中である。

敷地の北側に立つ鉄筋コンクリート造3階建ての住宅部分は足場がとれたところで、これから南側にパーゴラ付きのテラスをのせた駐車場と中庭が整備される予定だ。住宅部分のベランダには植物のプランターも置かれる。完成して時間がたてば、パーゴラには植物が這い、中庭の木々も育って、ベランダにかけて緑があふれるはずだ。そして、緑の上には、5つのコンクリートの壁柱が規則正しく並ぶ。公園から竣工後の姿を想像しながら眺めると、掃き出し窓とベランダが規則正しく並ぶ周囲の都会的な建物と、この「横浜の家」の外観がよく調和していると感じた。手嶋さんも「周囲の家が3〜4階



アクソノメトリック

リビングから見上げる円形の天井は、まるで時計のように刻々と表情を変える。

建てということもあり、ルネサンス期のパラッツォのような立ち方がふさわしいと考えました。ファサードは、公園の緑と周囲の建物の立ち方との連続性を考えた結果です」とのこと。パラッツォとはイタリア語で都市型の住宅を指す。公園とパラッツォ。周辺環境をしっかりと引き継ぐたはずまいだ。

ただし、公園は多くの人が集まる場所。北側の崖上に走る道路からの視線も気になる。1、2階は、駐車場やテラス、中庭があるので南側からの視線をカットできるが、3階は南北両側か

ら視線を受ける。そのため、手嶋さんは1、2階に主寝室や子ども室などのプライベートな空間、3階にパブリックな空間としてリビング・ダイニングを計画した。

パンテオンと ブリーズソレイユの ドーム


さて、「横浜の家」を通して「光のデザインテール」を考えると、取り上げるべきは2点あると思う。ひとつは、も

ちろん3階の天井。パンテオン（ローマ）を思わせるパターンと360度展開するブリーズソレイユ（ル・コルビュジェが提唱した建築的な日除けと目隠しを兼ね備えた格子）。スラブには円形の穴をあけたので、まるで大聖堂のドームのようになった。それから、もうひとつは建物全体にみられるコンクリートの仕上げの種類とその扱い方について。それではまず、3階の天井を建物全体のなりたちから確認しよう。

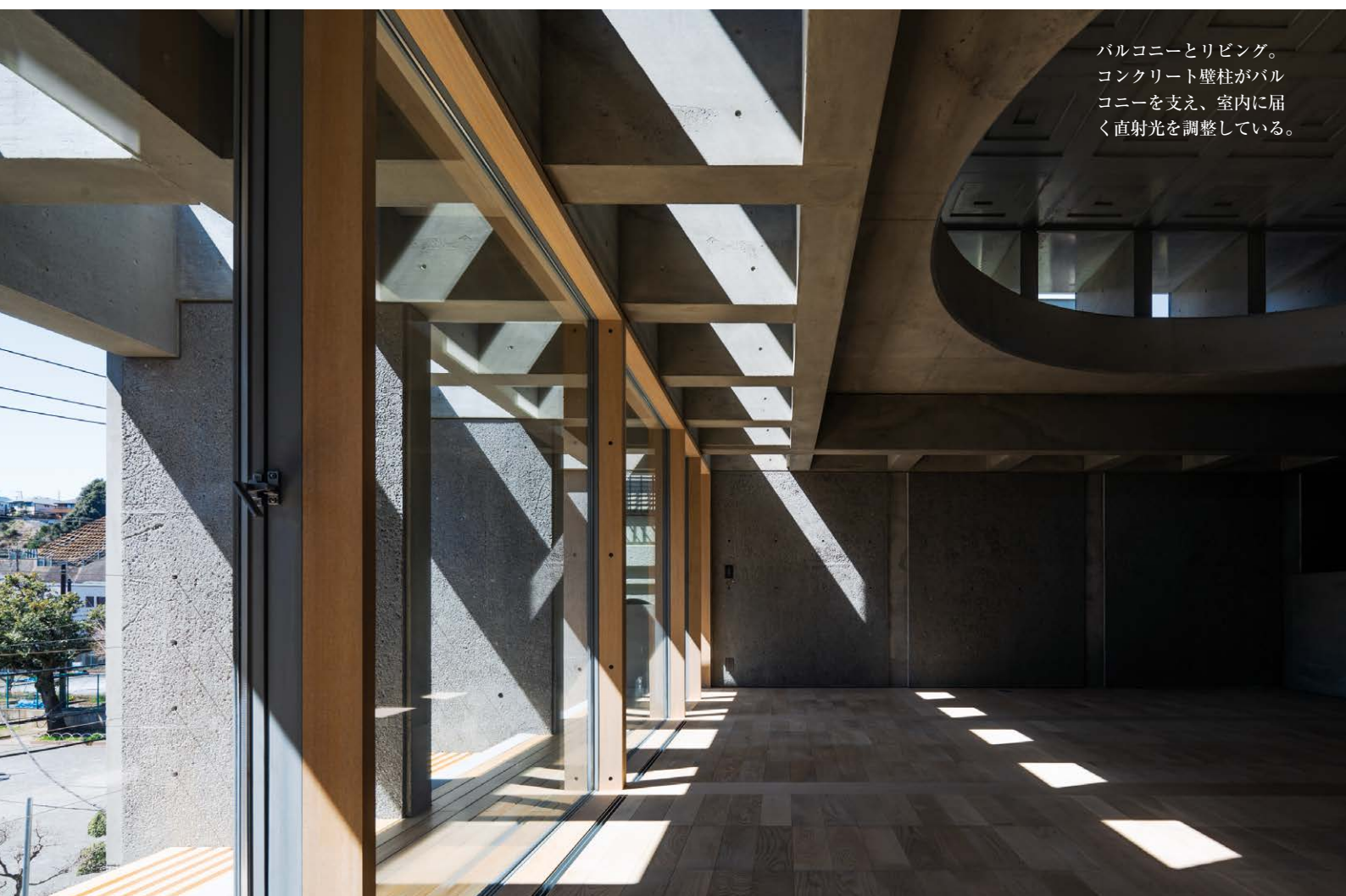
視野を持ち上げる 天井のパターン

この建物の平面は、突出部はあるものの、1880mm（壁芯）を単位とした4×4の正方形を基準とする。床は壁芯を2分割したワッフルスラブで、940mm（梁芯）を単位とした8×8の天井伏せをつくる。ほとんどの壁はこのグリッド上にあり、フローリングも、グリッドを強調するように敷く。

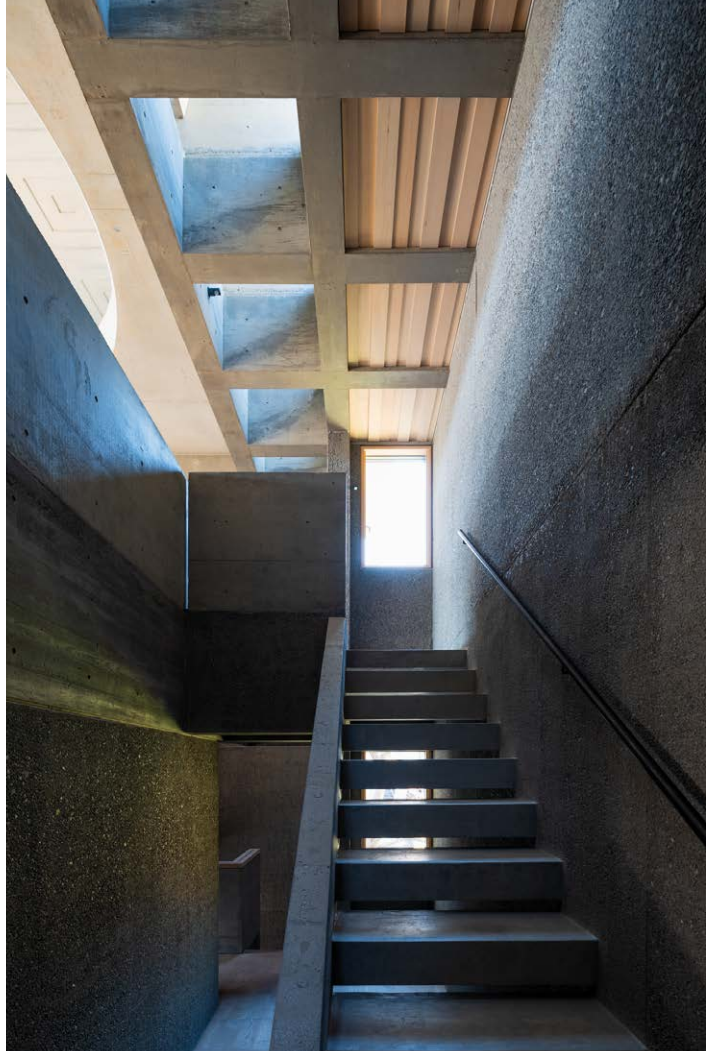
しかし、1、2階は細かく部屋で仕切られるので、生活が始まればさまざまな家具が置かれてグリッドは見えにくくなる。そんななか、建物全体のグリッドを把握できるのが3階の天井である。四角形のパターンは大きさの違うコンクリートパネルを3枚重ね、型枠が上手くはずせるように小口を斜めに加工して打設された。このパターンが刻々と表情を変えて時を伝える。また、大聖堂のドームのパターンや絵画には、訪れた人々の視野の中心をぐっと持ち上げ、さらに自分の立ち位置を



3階天井裏の空間。型枠には、厚さ12mmのコンパネを大中小3枚重ねにすることで、天井面の模様とツヤのある仕上がりを実現した。



バルコニーとリビング。コンクリート壁柱がバルコニーを支え、室内に届く直射光を調整している。



認識させる効果があるというが、3階はまさに視野を持ち上げ、この家のなりたいちと自分の位置を確認する場所になっている。

風が抜けるような 光の仕掛け

この天井面は、ブリーズソレイユで支えられ、円形の穴のあいたスラブはグリッドのひとまわり内側に浮いている。そのため、周囲に小さな吹抜けが1辺6個、全部で24個できる。そのうちひとつには螺旋階段が納まる予定で、スラブの上はキャットウォークになる。手嶋さんに円形にした理由を聞くと、「さまざまな案を検討しましたが、空間に最も奥行きが生まれた形を採用しま

した」とのこと。

3階は洗い出し仕上げの壁、帯鋸仕上げの床と、肌触りのよい麻のような空間だが、上部はツヤのある仕上げで、かつブリーズソレイユが窓枠を完全に隠すので、まるで風が通り抜けるような清々しさがある。部屋の周囲に24個の吹抜けがあるので、外からの光は天井面に反射せず、壁際から床へと落ちる。ドームとクーポラのように上下で

写真上／ホール。ハイサイドライトから光が落ちる。下／コーナーの吹抜け。右下に1階玄関、左にホール。

強いコントラストが生まれるのを避けて空間を一体にまとめている。そのうえで、階段部分を思い切って吹抜けにしたり、南側のベランダから木製のスノコを飛び出させたりした点は、上下階の空間的なつながりを意識したものだという。背の高いドーム空間に、たまたま1、2階がつくられたような印象も受ける。この一体感が、毎日家族の足を3階まで向かわせる原動力にな

るのかもしれない。

いきいきする光と エチケツト

では、取り入れた光を受け止める側はどうだろうか。この家は、床以外は鉄筋コンクリートの構造体そのまま仕上げになっていて、よく見ると、①コンパネを型枠に使用した仕上げ、②普通ベニヤを型枠にした仕上げ、③洗い出し仕上げ、④研ぎ出し仕上げ、そして⑤杉板を型枠にした仕上げと、全部で5種類の仕上げが使い分けられている。「削りの仕上げなどありますが、風化したらこんなふうになるね、という程度の表現にとどめました。仕上げの種類は、時間を経た素材の様子にシ

コンクリート面に反射する光は、
空の青、植物の緑、フローリングの木材の色など、
内外さまざまな色を拾い室内を彩る。

ンパシーを感じて生まれてきたのではないか、そんなことを考えているんです」と手嶋さんは言う。おおざっぱにいうと、①の仕上げは天井面、②はワッフルスラブ、③は壁面、④は床面、⑤は3階へ上る階段室の一部に使用されている。この使い分けによって、建

築を構成する床や天井、壁といった要素がそれぞれ個性をもち、メリハリのあふ空間が生まれている。また、ごく一般的なコンパネやベニヤの型枠も、ほかの仕上げの存在から個性が引き立つようになり、職人が丁寧に型枠を組んだり、各種の仕上げを施していった

りした様子が目に浮かんだ。

すでに紹介したが、フローリングは帯鋸仕上げにした。1枚の板は短く、片手で持てる大きさで親しみを感じる。続けて手嶋さんに聞くと、「環境によって、木も石も仕上げや使い方が変わるはずです。その判断は、エチケットの

ようなものではないでしょうか」と言う。3階の壁もそうだが、階段室など、洗い出し仕上げの壁には隅に開口部を設けて光を入れている。夕暮れ時の街のように、凹凸のある壁面を最も印象づける光だと気づく。この、いきいきとした光の扱いもまた、ひとつのエチケットだ。

1階や2階とのつながりを大切にしながら、家族が集まる3階には古代ローマや近代建築を思わせる光の天井をのせ、空間を強く印象づける。コンクリートや木材の多様な仕上げと使い分け、そして光の扱いからは、職人が壁や天井や床の表面を仕上げていく、丁寧な仕事の過程までが想像された。「横浜の家」の光のディテールをよく観察すると、建築や各要素もっているそれぞれの時間にまで光が当たっていくような、そんな可能性を感じた。

コーナーの吹抜けからトップライトを見上げる。外周にある24個の吹抜けのうち四隅にはトップライトが設けられており、1階まで光を届ける。

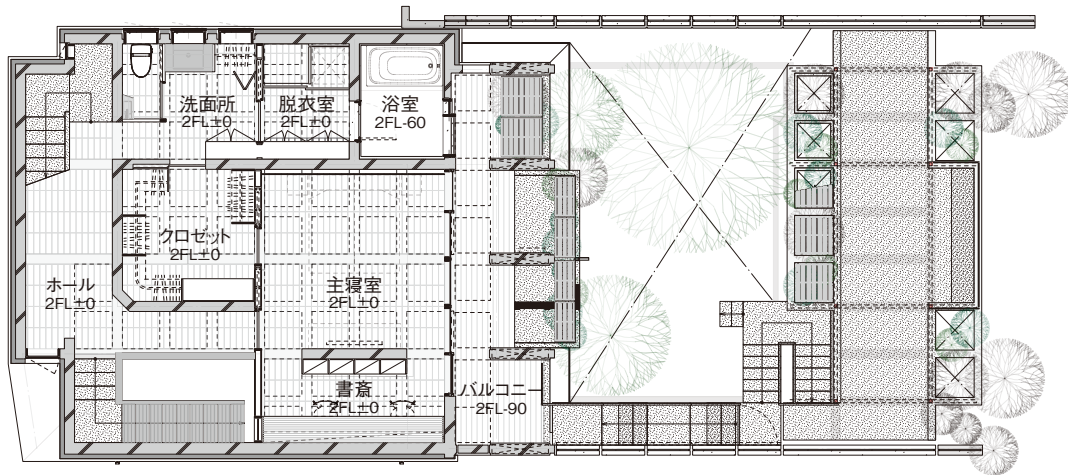
平面図

Special Feature
More Light

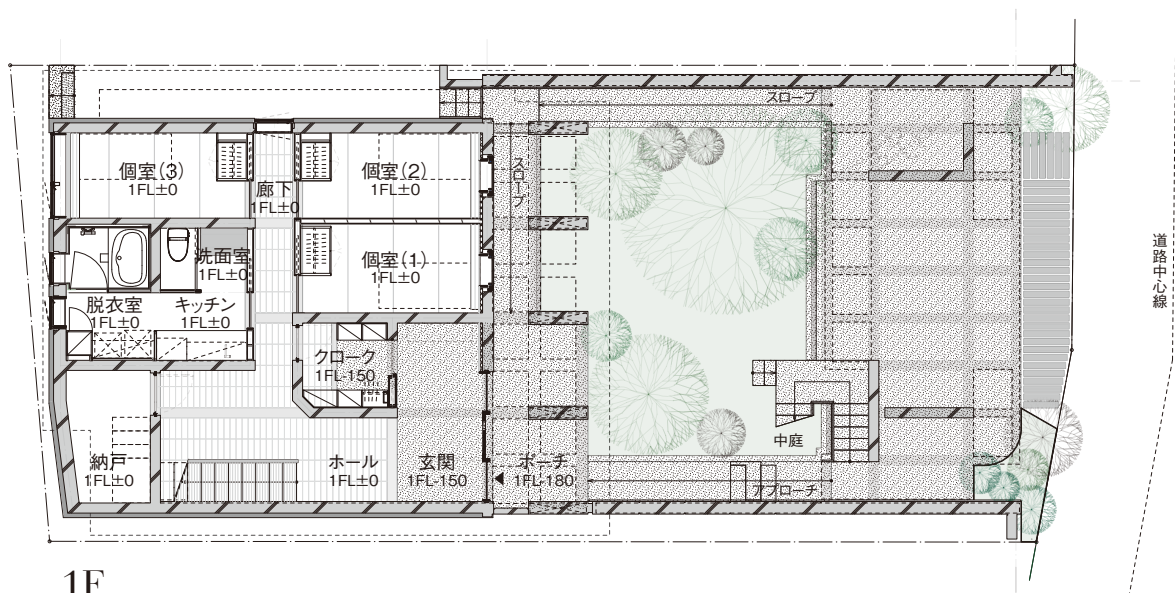
Case Study

01

House in Yokohama



2F

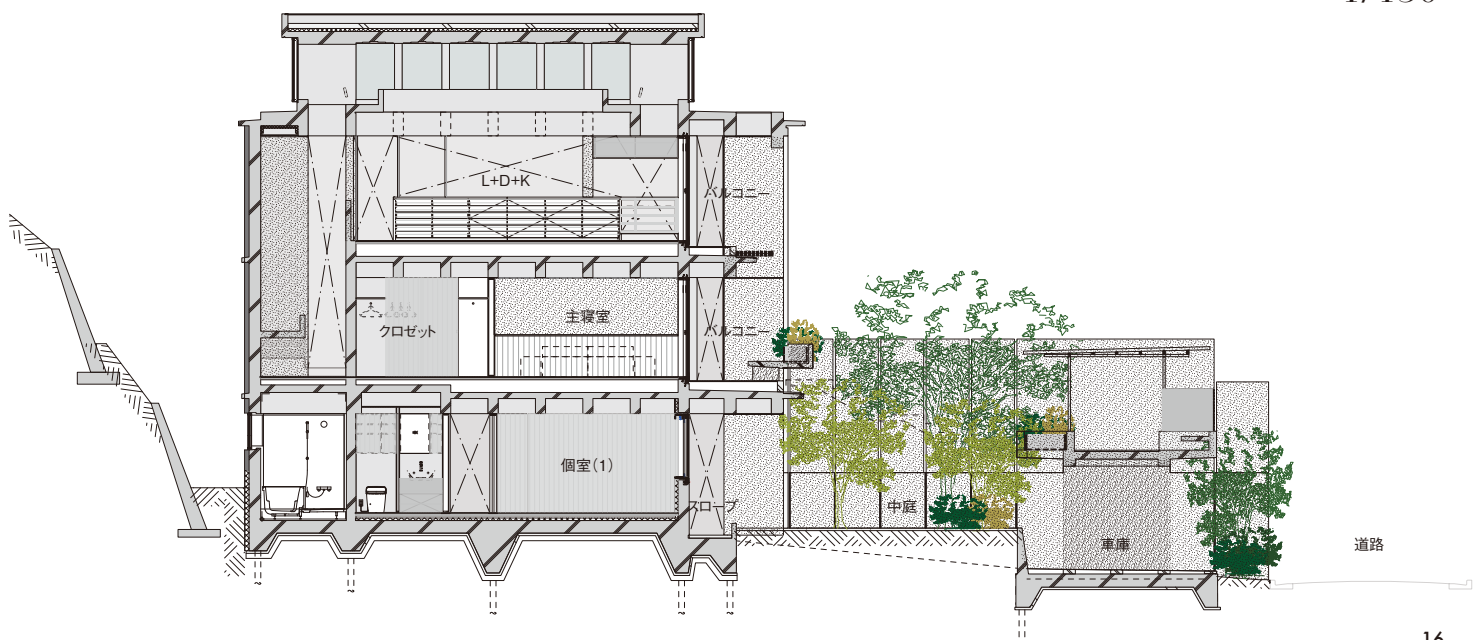


1F

断面図

0 1 2m

1/150





横浜の家

建築概要

| | |
|------|-----------------|
| 所在地 | 神奈川県横浜市 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 設計 | 手嶋保建築事務所 |
| 構造設計 | KMC |
| 施工 | 西村建設株式会社 |
| 階数 | 地上3階 |
| 敷地面積 | 194.12㎡ |
| 建築面積 | 107.10㎡ |
| 延床面積 | 236.14㎡ |
| 設計期間 | 2020年1月～2022年5月 |
| 工事期間 | 2022年6月～2024年3月 |

おもな外部仕上げ

| | |
|-----|--|
| 屋根 | コンクリート金ごて押さえ 塗膜防水+断熱材t=60mm |
| 壁 | 外装薄塗材E(砂壁状) 断熱材t=75mm、 コンクリート打放し仕上げ 保護材塗布 |
| 開口部 | スチールサッシ(製作)、 木製建具(製作) |

おもな内部仕上げ

| | |
|-------|--------------------------------|
| 2階主寝室 | |
| 床 | ナラフローリングt=14mm ソープフィニッシュ仕上げ |
| 壁 | コンクリート打放し 高圧洗浄仕上げ 保護材塗布 |
| 天井 | RC打放し仕上げ 保護材塗布 |

3階

| | |
|----|--------------------------------|
| 床 | ナラフローリングt=14mm ソープフィニッシュ仕上げ |
| 壁 | コンクリート打放し 高圧洗浄仕上げ 保護材塗布 |
| 天井 | コンクリート打放し仕上げ 保護材塗布 |



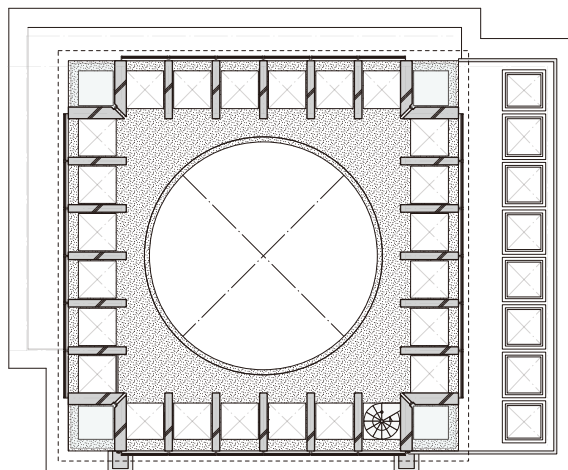
Teshima Tamotsu

手嶋 保

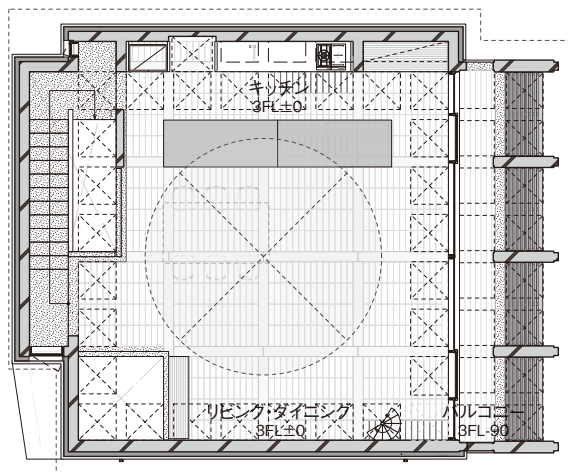
てしま・たもつ／ 1963年福岡県生まれ。86年東和大学工学部建設工学科卒業。90～97年吉村順三設計事務所。98年手嶋保建築事務所設立。おもな作品＝「三秋ホール」(2016)、「道灌山の家」(06)、「十条の家」(00)。

0 1 2m N

1/150



2F



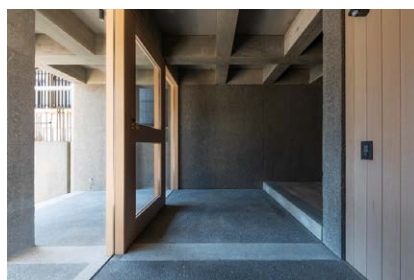
3F



バルコニーには壁柱間にベンチとプランターが設けられている。



2階主寝室からバルコニーを見る。



1階玄関。

ルーバーからの光が 居場所をつくる

武蔵野の住宅地に計画された若い夫婦のための住宅。

生活の中心となるリビングには複数の窓が設けられている。

若原一貴さんはそれぞれの窓に

それぞれのディテールを与えることで、

多彩な光による多様な居場所を創出した。

作品

小金井の住宅

設計

若原一貴

02

House
in
Koganei

吹抜けのリビング。通りに面した東側には高い位置と低い位置にふたつの窓が設けられている。



リビング。左上方、見込みの深い枠と羽板からなる窓から入った光は、ざらつきのある壁を伝い室内に広がる。



天井を低く抑えたテラスから1段上がると吹抜けのリビング。南側にはテラスとリビングをまたぐ横長の大きな窓。

1階を リビングにする利点

早春の朝、若原一貴さん設計の「小金井の住宅」を訪れる。
東西に延びる国分寺崖線（ハケ）を南に下ったところにある落ち着いた住宅地の一画。敷地は道に面する間口が

8つの窓がある名席と謳われる草庵茶室を京都に訪れたことがある。草庵茶室といえば、2、3歩ですべての壁や天井に手が届くほどの狭さと沈み込むような暗さが通例で、そこに8つの窓があるとはいかにも奇態。隅々まで明るく照らされた室内は風情のかけらもないのではという疑念をもちつつ入ったのだが、実際は壁面の7つの窓はいずれも連子窓か下地窓に障子が張られ、残る1つの天井の突き上げ窓はほんの少し開けられているだけで、室内はやわらかな明るさとの暗さが適度に交錯する紛れもない草庵茶室だった。フランス各地に点在するシトー派の修道院のいくつかを訪れたことがある。石づくりというよりは石の塊を彫り込んだようなたたずまいは「華美を排した厳かさ」と形容されるのが常だが、宗教上のきびしい戒律から遠く離れた旅人からすると、聖堂、回廊、共同寝室などの空間は、分厚い石にくり抜かれた開口を通り抜けた外光が、時には強烈な束となって深く差し込み、時には壁や床に反射していっばいに散乱し、室内は明るさと暗さが交錯して止まない光の饗宴の場と実感されるのだった。



やわらかな光を取り入れるためだけの窓。
食事をしながら外を眺めることができる窓。
個性豊かな窓たちが陰翳豊かな居場所をつくる。

7 m、奥行きは17 mほどで、三方に隣家がせまる。ここに2階建ての小住宅を据えるとした場合、2階にリビングを配するのが常套。そうすれば大きな開口をとりやすく、日当たり、眺望、セキユリティなどの点で具合がよいからだ。しかし若原さんは、周辺の宅地の庭に豊かな緑があり、すぐ東には神社の森があることから、ここでは接地性を重んじて1階にリビングを配するのがよいと判断した。かつて多くの文人が称揚した武蔵野の光景の残照が脳裏に映じたのかもしれない。

1階リビングの利を生かしているのは次の3点である。

ひとつは、南側の細長いアプローチに沿ってソヨゴ、ハイノキ、アオダモ、キンカン、ナンテン、イロハモミジなどのとりどりの小ぶりの植栽を配し、リビングの大きな横長窓からの眺めに坪庭のような親密な景色を与えていること。

ふたつは、リビングを天井高さ3・8 mの吹抜けの空間として、建築面積17坪の住宅のこぢんまりとした外観からは想像しがたい大らかで豊かな居住性をもたらしていること。

3つには、リビングの東側の大きな壁面に異なる性状をもつふたつの窓を設け、前述の横長窓と合わせて、吹抜けを陰翳に富んだ空間に仕立てていること。

以下、リビングに焦点を絞って見てみよう。

窓が居場所をつくる

前面道路からアプローチを伝って13m余りで入口扉にたどり着く。入ると床は黒灰色のモルタル仕上げで、そのまま「テラス」と名づけられた植物の鉢がある小スペースにつながっている。天井高さは2050mmと極限に近くまで抑えられている。そこから1段、20cm上がったところがナラ材フロリング、天井高さ3・8m、平面4×4・5mのリビングである。テラスの空間とはあらゆる点で鮮明な対比をなし、開放感がいちじるしい。

突き当たりの東側の壁面にふたつの窓（前頁を参照）がある。

ひとつは左手の下方にある1・2m四方の横滑り出し窓。枠の上端は1・6mと低く、視線は前面道路の端まで

遠く低く延びて広がりを感じさせる。2段になった木の窓台は床から30cmの高さで、見込み（奥行き）は30cmほどあり、腰掛けて和むにふさわしい場所になっている。障子を引き出して閉めると一転、屋外のヤマボウシの淡い樹影が障子にゆらめき、和の気配が濃厚に漂う。とはいえ、窓の正方形や障子の縦長の棧のプロポーションは、和への過度の傾斜を止めているようにもみえる。

窓の手前に丸い食卓が置かれている。いや順序は逆で、食卓の位置が台所のつながりで定まり、ルイス・ポールセンの照明器具が吊り下げられ、それにぴたりと合わせて窓が配置されているのである。

もうひとつの窓は壁面の右上隅にある。570×1500mmの縦長で、枠

←リビング北側の小窓。
家具化した窓枠に小物が置かれる。

の見込みは40cmと深く、厚い壁を切り欠いたような趣き。枠と同じ寸法の木の羽板が縦に3枚、外側のガラスに直角に取り付けられていて、朝のやわらかな光は室内深くに届き、昼間の強い光は羽板で適度に抑えられ、反射光が天井面、壁面を舐めるように照らす。漆喰の天井と壁は光を照り返すツヤのある平滑な仕上げではなく、塗り手の痕跡がはつきりとわかる粗い仕上げとされていて、光を半ば吸収し、半ば散らしている。

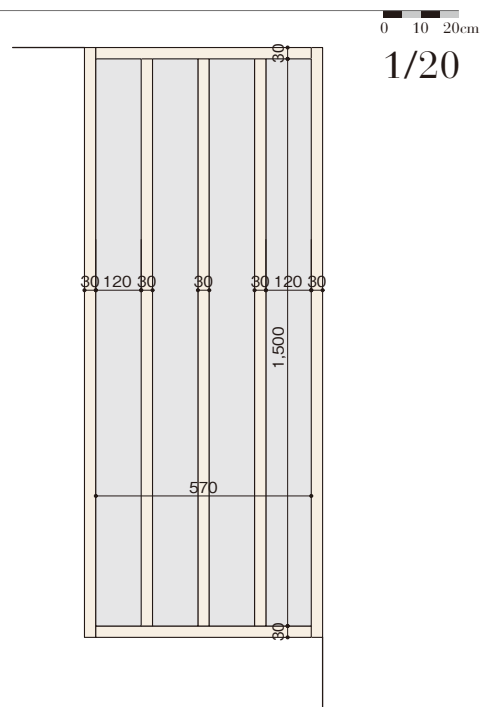
この窓の真下のコーナーにはソファが置かれている。薄あかりのなかでのんびりとくつろぐのによく、ゆったりと微睡むにはさらによい場所だ。スポットライトがさりげなく設置されていて読書や手仕事の用を助けている。これら2つの窓のみではやや不足す

リビングには掃き出し窓はなく、部屋幅いっぱい窓や床から天井までの窓もない。設計者の経験を通して得られた寸法による開口が複数、慎重に配されて、吹抜けの空間に明暗が混じり合う豊かで深みのある場をつくり出している。体験はできなかったが、日が

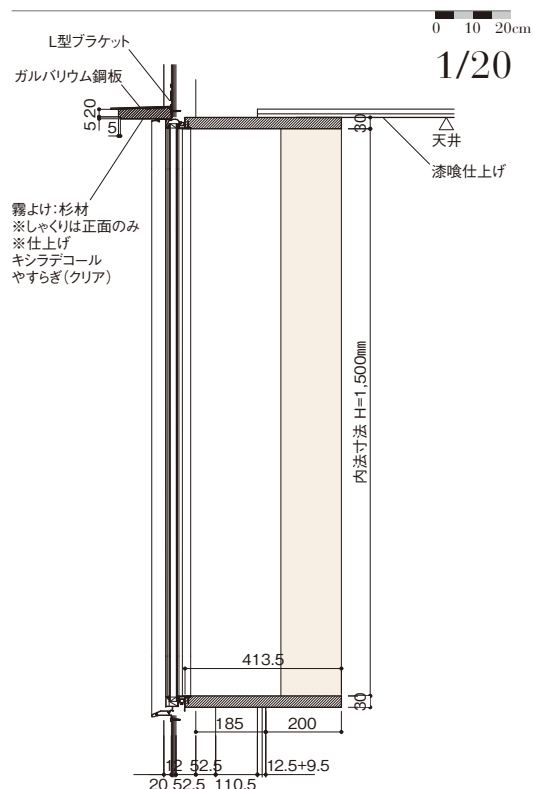
明暗が混じりあう 深みのある空間

る光量を補っているのが、南側、テラスにまたがって設けられている長さ3300mmの横長窓であり、北側、造り付けの飾り台の小窓、さらには台所の小窓である。それらは視線をめぐらす先ともなつて、静穏な空間にわずかな、しかし効果的な動きを起こす働きをしている。

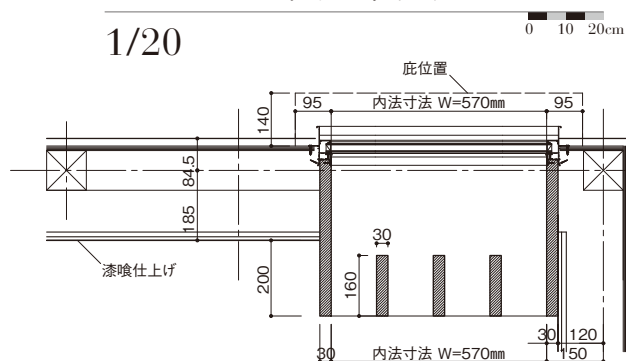
窓姿図



窓断面詳細図



窓平面詳細図



リビング東側の縦長窓。
下にはソファが置かれく
つろぎの場所となる。

落ちた後には目線から上の空間はうっすらと闇に包まれ、いくつかの照明が温かな輪をなして、住み手を包み込むのだろう。

しばらくソファに腰を落ち着けてみると、記憶の底からうつつすらと浮かび上がってきたのが冒頭に記した京都の八窓の草庵茶室であり、フランスのシトー派修道院の回廊だった。用途も、時代も、場所も、様式も異なる3つの空間が攪拌され、ひとつに溶けあっていく夢想。それもそのとき限りのことで、時間が変われば、季節が移れば、ま

た別の経験が脈絡なく呼び戻され、新たな夢想に誘われるのだろう。均質な光が支配する空間では生まれようがな



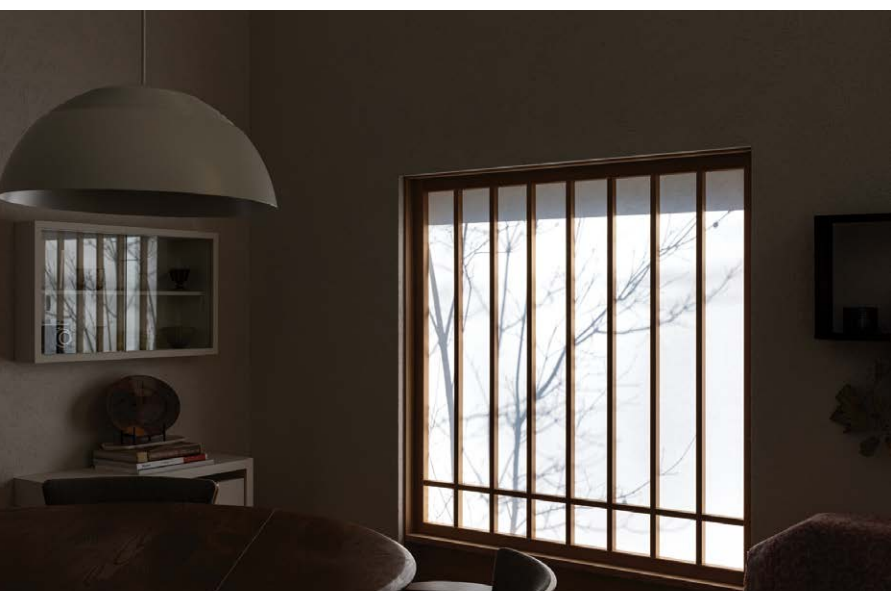
い不可思議な力が、この吹抜けには備わっている。若原さんの設計が借りてきた要素の寄せ集めではなく、多様な経験と知見が幾重にもろ過された先に独自のスタイルへと昇華したものだからだろう。

吹抜けはテラス、台所、さらに2階の4畳半の和室ともつながっていて、住まいの全体が回遊性の高いワンルームといえる状態となっている。それが吹抜けの空間を行き止まりの閉じた場となることから救っている。それを可能にしている背後の仕掛けがヒートポ

ンプ式の輻射冷暖房システムだが、本題を外れるのでここでは詳述しない。

この住まいのそこそこにはガラスや焼き物の器、キルティング、絵画、掛け時計など、住み手のセンスによって選ばれた愛らしい品々が置かれている。かつて谷崎潤一郎は「闇」が幾重にも塗りこめられたのが漆器であると記したが、ここの品々もそれぞれに場所を得て、微妙に異なる光を吸い込み、あるいは溜め込んで固有の表情を呈し、暮らしたに味わい深い奥行きをもたらしている。

それぞれの居場所にはそれぞれの窓があり、
それぞれの役割や性能に応じた
ディテールやプロポーションがある。



リビング東側の横滑り出し窓。手前の食卓と高さを合わせ低い位置に設けた。

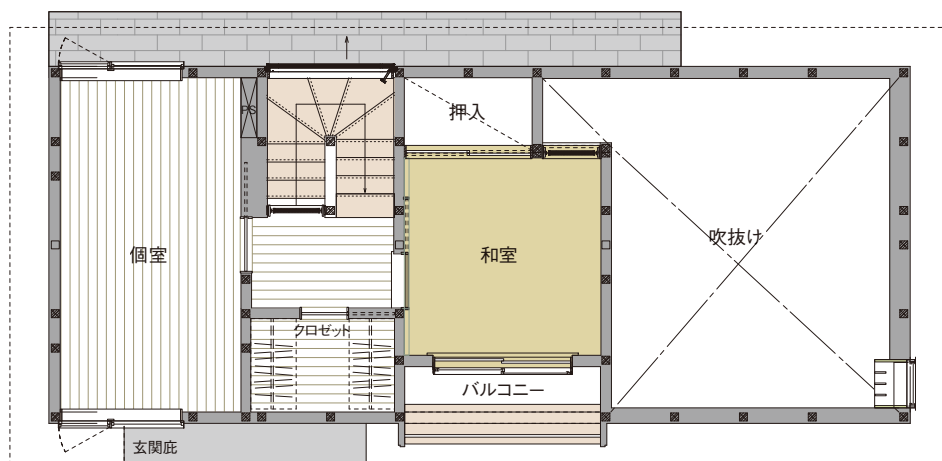
Special Feature
More Light
Case Study

02

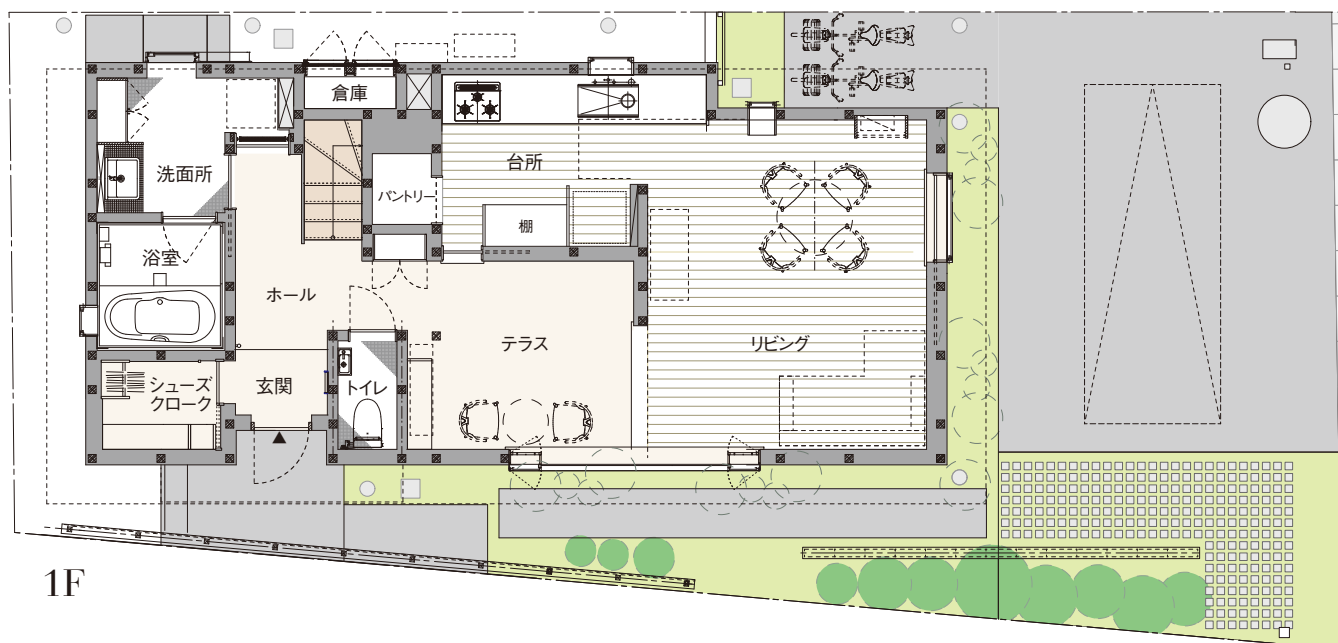
House
in
Koganei

平面図

0 0.5 1m N
1/100



2F

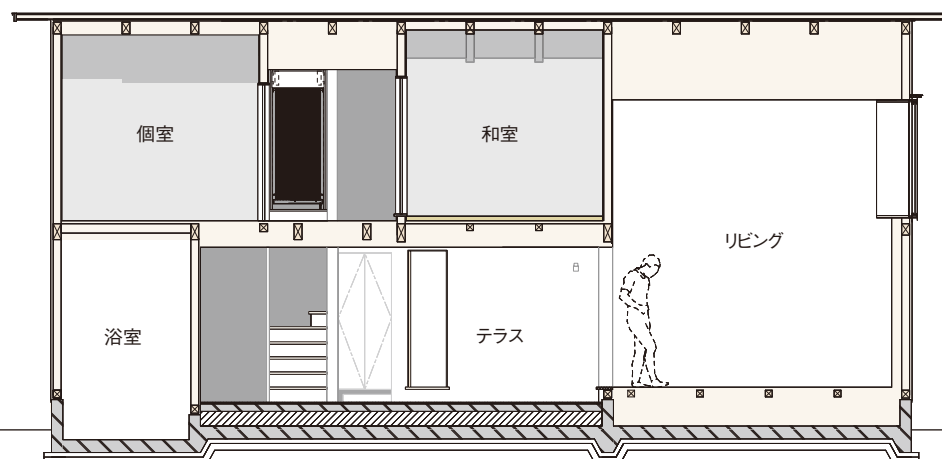


1F

断面図

0 0.5 1m

1/100





小金井の住宅

建築概要

| | |
|------|-----------------|
| 所在地 | 東京都小金井市 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 設計 | 若原一貴+若原アトリエ |
| 構造設計 | 長坂設計工舎 |
| 施工 | 木村工業 |
| 階数 | 地上2階 |
| 敷地面積 | 129.36㎡ |
| 建築面積 | 55.98㎡ |
| 延床面積 | 85.52㎡ |
| 設計期間 | 2021年3月～8月 |
| 工事期間 | 2021年9月～2022年4月 |

おもな外部仕上げ

| | |
|-----|--------------------------|
| 屋根 | ガルバリウム鋼板 平葺き |
| 外壁 | ラスモルタル t=20mm アクリル系塗装 |
| 開口部 | アルミサッシ |
| 外構 | コンクリート金ごて押さえ |

おもな内部仕上げ

| | |
|---------|-----------------|
| 台所、リビング | |
| 床 | ナラフローリング t=15mm |
| 壁・天井 | PB2枚張り 漆喰仕上げ |

玄関、ホール、テラス

| | |
|------|--------------|
| 床 | モルタル金ごて押さえ |
| 壁・天井 | PB2枚張り 漆喰仕上げ |

階段室

| | |
|------|----------------|
| 床 | ホワイアッシュ t=30mm |
| 壁・天井 | PB2枚張り EP |

Wakahara Kazuki

若原一貴



わかはら・かずき／1971年東京都生まれ。94年日本大学芸術学部卒業後、横河設計工房入社。2000年若原アトリエ設立。19～22年日本大学芸術学部デザイン学科准教授。22年～同大学教授。おもな作品＝「南沢の小住宅」(12)、「恵比寿の五角形」(18)、「リンボクテラス」(23)。



2階和室。左に輻射式冷暖房パネル、右の引き戸を開けるとバルコニー。



2階バルコニー。座面と背もたれのあいだのスリットから光が入る。



和室の輻射式冷暖房パネル（樹脂製）。

Special Feature
More Light

Case Study

03

Membrane House



2階LDK。雲のような片
流れの膜天井が覆う一室
空間。

天気を映す雲のような天井

作品

膜屋根のいえ

設計

永山祐子

「天井から光を取り込んだら朝から気持ちいいだろうな」。過去にテント膜を利用した仮設建築を手がけていた永山祐子さんは、それを恒久的な建築に、応用することを考えて、屋根一面が膜で覆われた住宅を構想した。

仕事柄、年に何件も最新の住宅建築を見る機会があるが、それらは築年が新しいだけで、使われている技術のほとんどはさして新しくはない。ガラスサッシの断熱性能や空調設備の性能などのスペック値は漸進的に向上しているのだろうが、何かが根本的に新しい住宅にはめったに出合うことがない。それが出し抜けに立っていたのである。杉並区の密集した住宅地のなかに。

空を映し

ふわふわ光る

雲のような屋根

阿佐ヶ谷駅から徒歩10分弱。道は細く、2階建ての戸建てやアパートがひしめく昭和そのままの住宅地のなかに立つ、片流れ屋根の白い小さな家。60㎡という狭い敷地に比して広めにとられた前庭には、ヤマボウシやアオダモなどが豊かに植栽され、白い壁面に樹影を落とす。せわしない都会にあつて、ここだけゆったり時間が流れている山小屋のようなのである。玄関扉を入ると、ホールの床もまた飛石と露地が続いており、ヒサカキやヤブツバキなどの植栽が吹抜けの天井に向かって伸びている。その上部からは白くやわらかな光。家の中なのに、坪庭のような静けさに包まれた、小さくもぜいたくな空間である。

円弧を描く壁面の裏側は寝室と水まわり。全体的にはの暗く、浴室とトイレ以外は一枚も扉で仕切られていないワンルームなので、1階のどこにいて



2階LDK。片流れの天井
高さはおよそ1.8mから5m。

1・8m、高いほうは5mもあり、しかも奥に向かって棟木が高くなっている。屋根面全体が複雑な3次元カーブを描いている。しかもその屋根面から下膜がカタナリー曲線を描いて吊り下げられ、ふわふわとした白い雲の下にいるかのよう。このふわふわ感、内膜はポリエステルだが、外膜はその正式名称をガラス繊維入り不燃テント膜といい、東京ドームの屋根でおなじみの素材である。考えたみれば膜屋根は、駅舎や公共施設ではおなじみの構造であるが、個人住宅となるとあまり例をみない。古くは1980年代、山本理顕自邸「GAZEBO」などでテフロン膜の屋根

が登場したが、あくまで外部のテラスを覆うための「屋上屋」であり、むしろ鉄とコンクリートのスクエアな箱にやわらかな曲線の膜屋根を架けるという象徴的な意味合いが強かった。

だがこの「膜屋根のいえ」には瓦もスレートもガリバリウム鋼板もなく、内外2枚の膜と断熱材だけで屋根面が構成されている。当然ながら屋根自体が劇的に軽くなるので、それを支えるT字型のCT形鋼材は幅・せいともに150mmほどで済む。まるで障子の組子のような軽快なプロポーションであり、堅牢な小屋組みの上に屋根を葺くという古代以来の建築の常識が、ここでは軽やかに覆われている。

仮設で試みた 膜屋根を 恒久的な建築に

「施主は小学校の同級生なんですよ。私も地元が阿佐ヶ谷なので、幼い頃から知っている男性で、数年前突然に、家を設計してくれないかな、といった感じでお願ひされました」

と設計者の永山祐子さんは言う。商社勤めで海外のさまざまな国に赴任し、ある意味ノマドのような生活をしてきた。炊事はあまりしないのでキッチンまわりは最小限でよく、友人を招いて楽しめる空間にしてほしいというのが依頼内容であった。一度はハウスメーカーを検討したものの、出てきたプランがまったくピンと来ないので、永山さんに依頼したのだという。



「実家も近く、両親も互いに知っていて、ゆーこりん」って呼ばれるような関係ですから、彼のパーソナリティはだいたい把握しているんですね。敷地は狭く立て込んでいたので、壁の窓は最小限に閉じて、天井から光を取り込みたいことを最初に考えて、以前に仮設で手がけたことがある膜屋根を、いつか恒久的な建物に使えないかと思っていたので提案してみたのです」

永山さんが最初に膜屋根を手がけたのは2016年夏。「HOUSE VISION2」展で、壁も屋根もテント膜で覆われた「の家」を提案した。さ

半透明なテント膜でつくられた
膜屋根によって、
室内は白くやわらかな光で満たされる。

らに3年前の「Takanawa Gateway Fest 2021」でも白い円形のテントが連なるパビリオン会場を設計している。そこで同じチームのTSP太陽に屋根工事と鉄骨構造と外装を、内装はこれも旧知のルーヴィスに分離発注したという。

写真上／1階ホールの植栽が2階に顔を出す。下／庭を丸く取り込んだような1階ホールの吹抜け。

「小さな物件なので分離発注する手間も大変だったのですが、ルーヴィスの担当者の方が偶然にも施工現場の目の前にお住まいだったんです。TSPのチームのみなさんも、今まで仮設物しか扱ったことがないので、どんな家になるのか楽しみですと全面協力してく

れました」

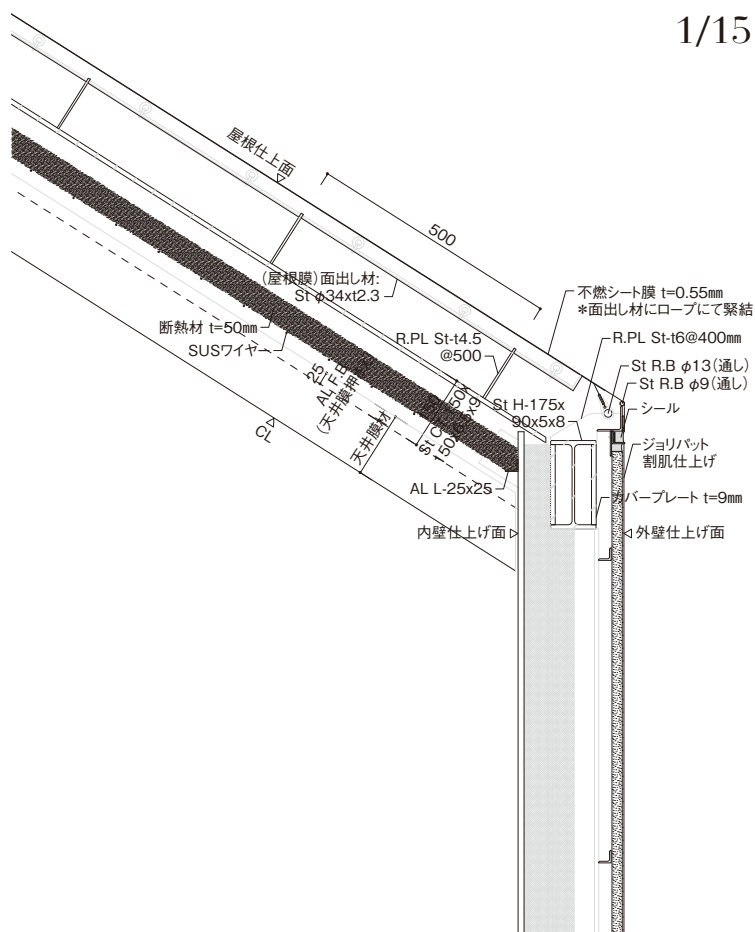
施主に理解があり、技術力のある施工業者のサポートも十全。とはいえ、恒久的な住宅の膜屋根をどのようなディテールに納めるべきなのか、前例はほとんどなく、試行の連続であった。光を透過するタイプの断熱材を使用するにあたって、厚みによってどれぐらい光量が変わるのか。段ボールで頭がすっぽり入る箱をつくり、外光を遮断した状態で太陽に向けてのぞいて、光の透過性を確かめたりしながら素材を決めていった。また夏の日差しや冬の冷気による温度変化を抑える最適な暖冷房のシステムを探るべく、CFD



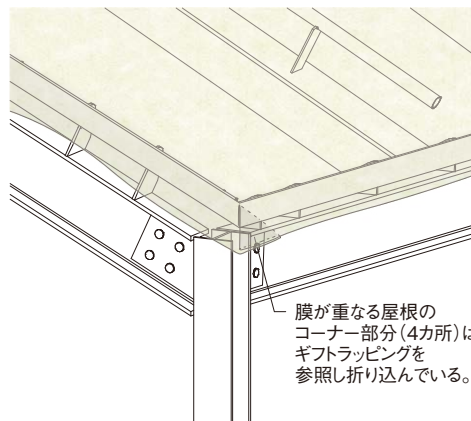
短手断面部分詳細図

0 10 20cm

1/15



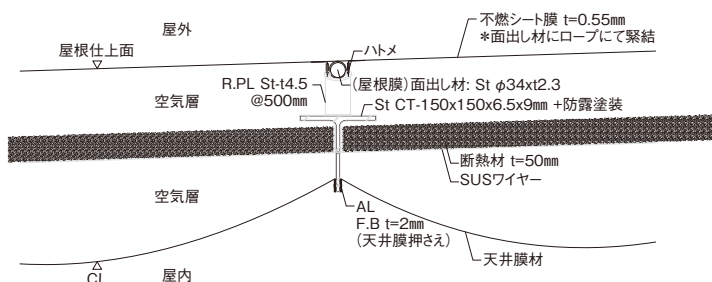
膜屋根端部



長手断面部分詳細図

0 10 20cm

1/15



(Computational Fluid Dynamics) で室温などを解析。最も効率のよい位置に排気設備とエアコンを設置して、対流式と輻射式を併用した空調システムを採用している。

こうした光量や室温といった基本的性能をクリアするにとどまらず、ディテールの意匠的なこだわりにも、時間と労力を割いている。たとえば下膜のカテナリーを描く曲線を等間隔に美しく揃えるために、一枚一枚異なってくるテント膜の形状をCADを駆使して

計算し、描き出さなければならなかった。また外観においては、屋根のテント膜と壁との接合部、軒のラインをなるべくすっきり薄く見せることにこだ

天候によって表情を変える膜屋根。

夕暮れ時には室内を赤く染め、

夜になると街を照らすあかりとなる。

わった。さらにテント膜の四隅の部分は、プレセントの包装紙で角を折るのと同様に、膜を折り込むディテールとした。

素材と光の組み合わせを設計する

テント膜で個人住宅の屋根を架けるという新しい技術的試みでありながら、どこかしら、ギフトボックスの新しい包装のアイデアをいろいろ試して楽しんでいるようなところもある。その肩肘張らない造形が、「出し抜けに、根本的に新しい住宅に出合った」という冒

頭的印象につながっているのかもしれない。

「天候や時刻によって室内の光の色が変わることはある程度予想していましたが、夕焼けの空の色が室内に広がったときの感動は想像以上でしたね。屋根の高い部分から、日が傾くにつれて少しずつ赤く染まっていくんです。そして夜になるとライトが天井に樹影を映して、まったく違う雰囲気になり

ます。外から見ても屋根面がぼわっとなんか行灯のように光っているの、近所の同級生のお母さんたちのあいだで、『うちちゃんが設計したお家、中はどうなっているの?』と話題になっているみたいです」

懸念事項として、雨音が響くのではないかと寝室を1階に置いたのだが、施主いわくそれほど気にならず、むしろ雨音など自然の音を楽しんでいると

2階LDK。夕焼けによって赤く染まる膜天井。

夜は室内のあかりで膜屋根が光り、行灯のように街を照らす。

Special Feature
More Light

Case Study

03

Membrane House

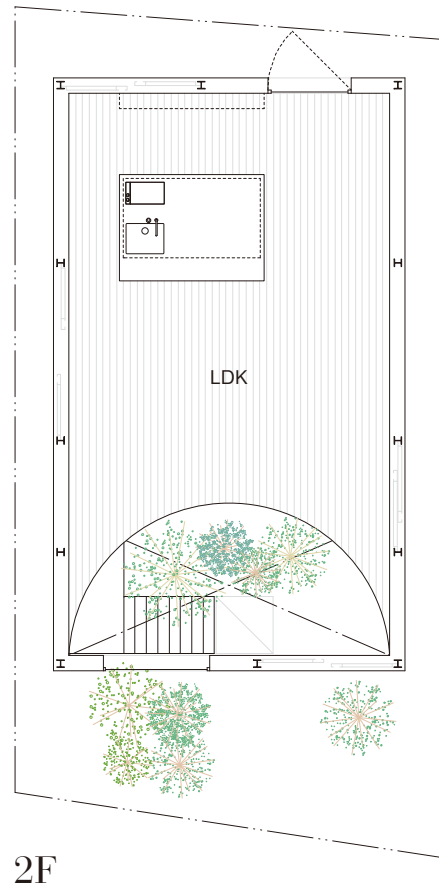
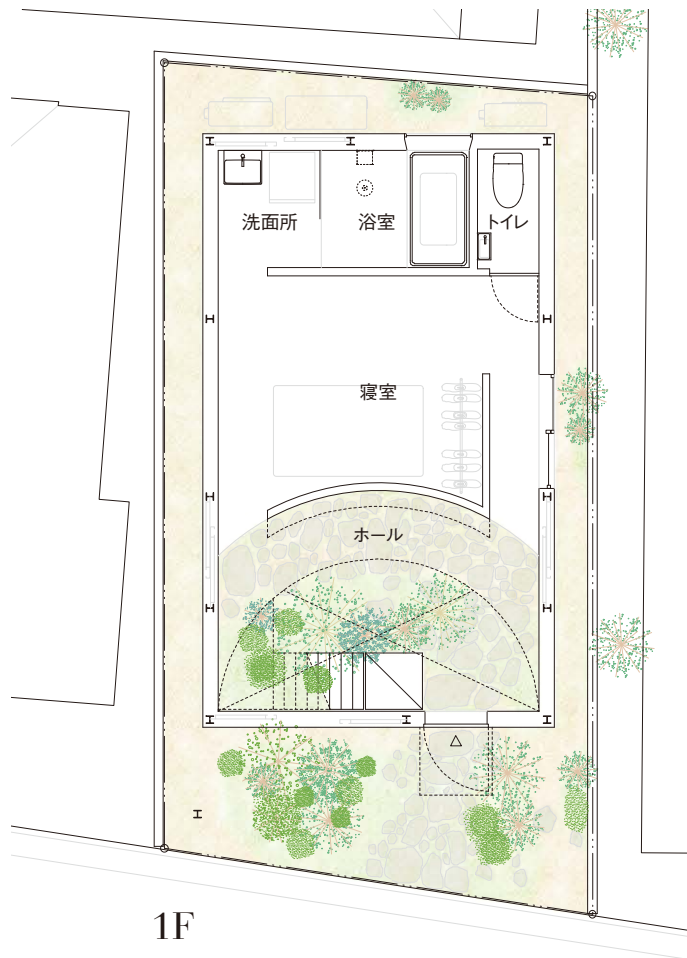
のこと。大雪の日も、急勾配の屋根で滑るため、雪の荷重でテント膜がたわむこともなかったという。

間取りも造形もいたってシンプルであるが、素材と光の入り方を変えるだけで、ここには誰も体験したことがない新しい空間が創出されている。永山さんは、素材そのものよりも、「素材と光の組み合わせ」に興味があるという。確かにこれまでの作品においても、そ

のふたつの要素が大きなポイントになっているのだが、この「膜屋根のいえ」は、最初に美しい光ありきで建築家の美学で設計されたというよりも、施主が、施工者が、ご近所さんや友人が、ともにワクワクするような空間を目指した結果として、白いテント膜とそれを透過した美しい光との組み合わせが地上に舞い降りているように思えた。

平面図

0 0.5 1m
1/100



長手断面図

0 0.5 1m
1/100





膜屋根のいえ

建築概要

| | |
|-------|--------------------------|
| 所在地 | 東京都杉並区 |
| 主要用途 | 専用住居 |
| 設計 | 永山祐子建築設計、 吉田昌平建築設計事務所 |
| 構造設計 | 平岩構造計画 |
| 外構・造園 | 荻野寿也景観設計 |
| 施工 | TSP太陽、ルーヴィス |
| 階数 | 地上2階 |
| 敷地面積 | 60.00㎡ |
| 建築面積 | 36.50㎡ |
| 延床面積 | 62.64㎡ |
| 設計期間 | 2020年12月～2021年10月 |
| 工事期間 | 2021年11月～2022年7月 |

おもな外部仕上げ

| | |
|-----|---------------------------------|
| 屋根 | ガラス繊維入り不燃テント膜 |
| 壁 | ジョリバット割肌仕上げ |
| 開口部 | アルミサッシ |
| 外構 | 庵治石、砂利、コケ、アオダモ、 イロハモミジ、ヤマボウシ |

おもな内部仕上げ

| | |
|-----------------|------------|
| リビング、ダイニング、キッチン | |
| 床 | アッシュフローリング |
| 壁 | PB 塗装 |
| 天井 | ポリエステル膜 |

浴室

| | |
|----|-----------------|
| 床 | 特注タイル(永山祐子デザイン) |
| 壁 | モルタル金ごて押さえ |
| 天井 | 珪酸カルシウム板 防カビ塗装 |

トイレ、寝室

| | |
|------|------------|
| 床 | モルタル金ごて押さえ |
| 壁・天井 | PB 塗装 |

ホール

| | |
|---|--------------------------|
| 床 | 庵治石、砂利、ヒサカキ、 ヤブツバキ、コケ |
| 壁 | PB 塗装 |



1階ホールの裏側には寝室と水まわり。

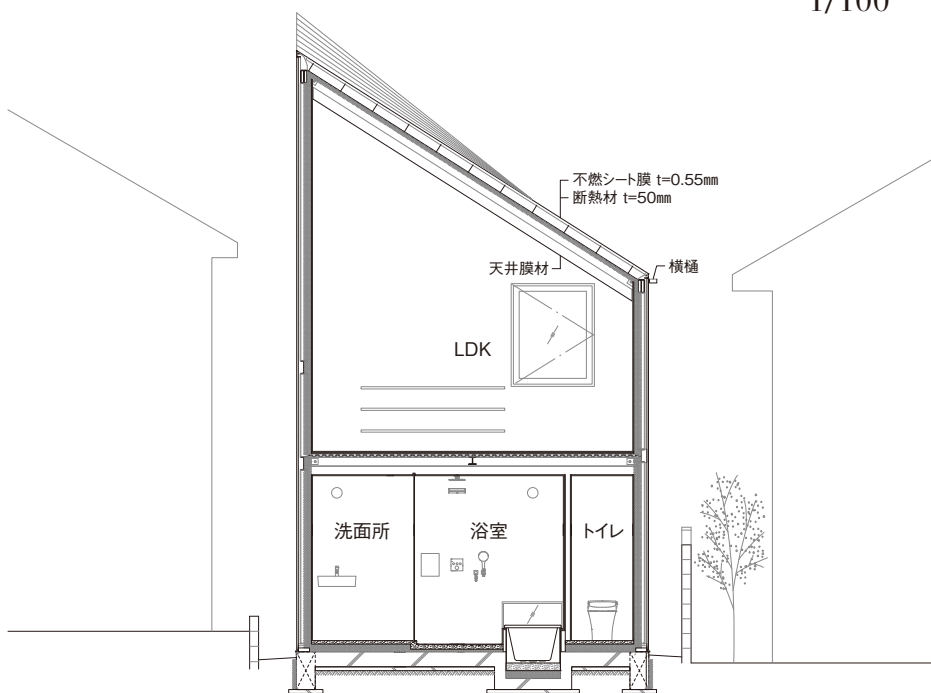


1階ホールから玄関を見る。さまざまな植栽が植えられている。

短手断面図

0 0.5 1m

1/100



Nagayama Yuko

永山祐子

ながやま・ゆうこ／1975年東京都生まれ。88年昭和女子大学生生活美学科卒業。1998～2002年青木淳建築計画事務所。02年永山祐子建築設計設立。おもな作品＝「東急歌舞伎町タワー」(23)、「ドバイ国際博覧会日本館」(21)、「JINS PARK前橋」(21)。

光を集めてととのえる 空気の部屋

作品

設計

光のあみの家

今村水紀＋篠原 勲＋河合伸昂

光を反射・分散させるエキスパンドメタルの庇。
光を拡散・透過させるアクリル天井。
ささやかな住宅の改修のなかで、
光の特性を最大限に生かしながら、
調整された心地よい光と熱を室内に導く。

主室から南側の窓を見る。
2階空気室からのやわらかな光と、エキスパンドメタルの庇によって現れる光の模様。

Special Feature
More Light

Case Study

04

House of the
Net of Light

2階空気室。スミ7%で印刷した2mm厚アクリル板の床を透過させることで、1階にやわらかな光が落ちる。

この住宅を訪れて最初に目にとまるのは、大きく張り出したアルミの庇だ。日光を反射して、2階の立面を明るく照らしつつ、1階の空間には網目模様の影を落とし、絶え間なく家の表情を変化させていく。「光のあみの家」という名前も、ここに由来しているのだろうか。

家族に合わせて 空間をととのえる

「光のあみの家」は、世田谷区の閑静な住宅街にある。近隣の寺社が周辺一帯の土地を所有しているため、ゆとりのある区画や十分な幅員の道路、境内とその周辺の豊かな緑といった、良好な環境が長らく維持されてきた。

施主は両親と子ども3人家族で、この地で築約50年の木造住宅を購入した。その後設計を依頼したのが、今村水紀さんと篠原勲さん（EiCo.）だった。理由は、自分たちで改修設計をした住宅「駒沢公園の家」（2011）に自ら住み、何よりそこでとても楽しそうに暮らしていたから。そんな建築家は信頼できるし、「暮らしの先輩」としてよいアドバイスをきっとくれるだろう、と思ったそう。事務所が近隣にあり、対話を重ねながら家づくりを進めていけるであろうことも、決め手のひとつだった。

当初は、建て替えと改修の双方の可能性が念頭に置かれていたが、結果的には、ほとんど迷いなく改修に決まる。施主のおふたりは、かつての海外生活



上から見下ろしたエキスパンドメタルの庇。日光を反射して2階の室内に導く。

Special Feature
More Light

Case Study

04

House of the
Net of Light

下から見上げたエキスパンドメタルの庇。光を通しつつ、雨はさえぎることが出来る角度に調整。



エキスパンドメタルの庇は、

1階に網目模様の光を落とすと同時に、

2階を反射光で照らすための装置。

主室を快適にする 空気室という仕掛け

割り切っていえば、この改修の一番大きな目標は、1階の主室を年間を通して快適な場所にするところだ。そのため、まずは最も大きな気積を、住まいの中心かつ風が抜ける南北方向に据えて主室とする。その西側には玄関とキッチンと和室を、東側には寝室と水まわりを納めた。そして2階の大部分を、人のための空間ではなく、熱と光を調整するための「空気室」とした。こう

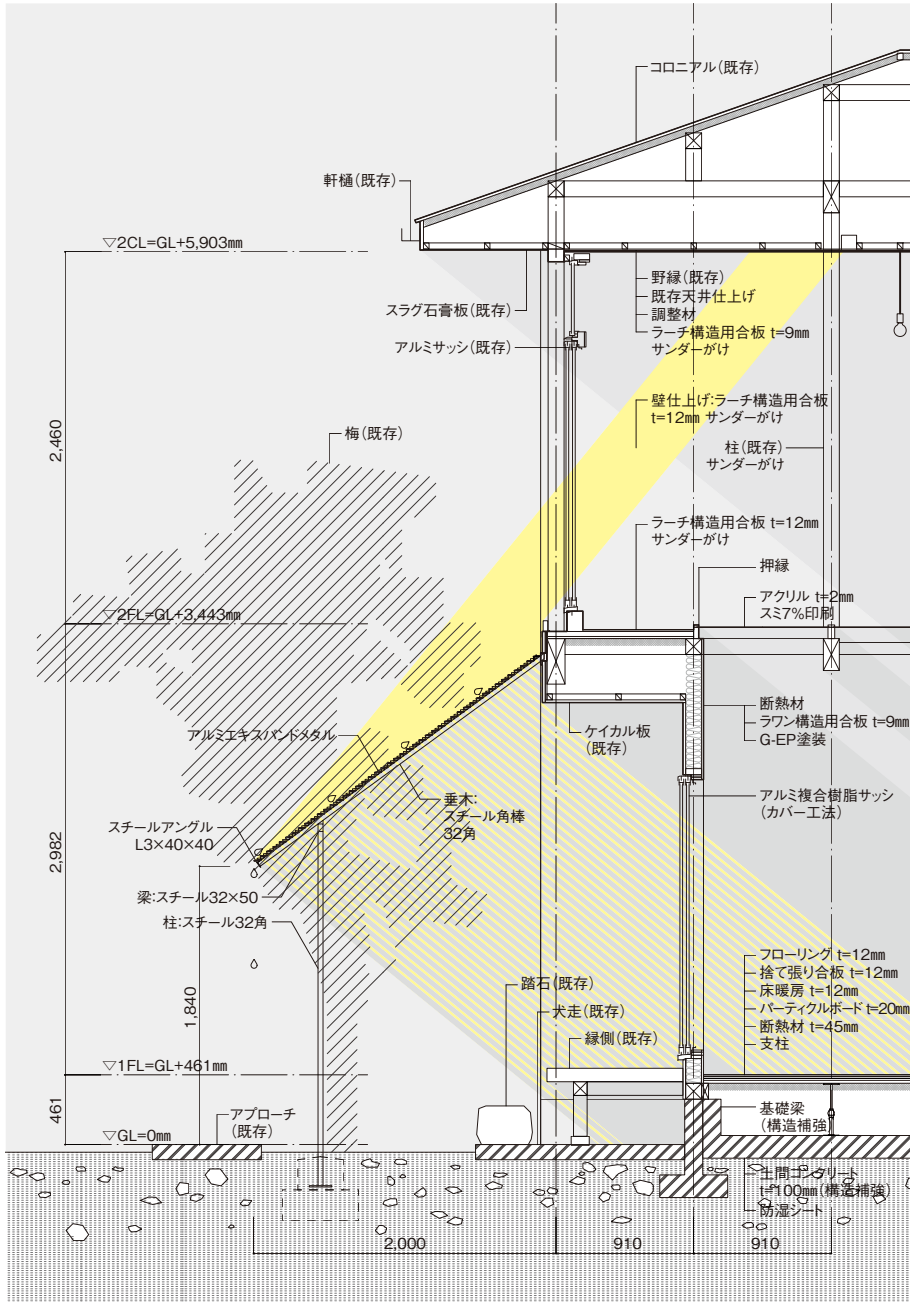
して主室の両側と上部に、外との緩衝材となるような空間（空気層）をつくり、主室を立体的に包み込んだ。「光のあみの家」にとって「空気室」は大きな特徴のひとつだ。この空間を、主室と同化して吹抜けにしてしまえば、上下階であたたかい空気と冷たい空気がくつきりと2層になってしまう。そのため、主室上部の空気層を塊として維持できるようにしたわけだ。新築では生まれえない、改修ならではの斬新な回答は、自邸での経験がアイデアのもととなっているという。

また、この空気室と主室の境界面にも、独特な工夫がなされた。既存の2階の床を撤去し、代わりにグレーのドットを印刷したアクリル板を一面に敷いたのだ。ドットの密度を変えて印刷したサンプルを何パターンも用意し、実際に現場に敷いて、施主とともに光の透過具合を確認したという。アクリルが透明すぎると光が強くてほりも目立つし、上下階での視線も気になる。

断面詳細図

0 0.5 1m
1/50

エキスパンドメタルを中心とした光のディテール。
直射日光を2階への反射
光と1階への透過光に分
ける。



エキスパンドメタルの 思いがけない役割

反対にグレーの色みが強くなると、空間全体が暗くなってしまふ。2階の開口から燦々と差し込んでくる光を、ふわりとやわらかく拡散して主室に届けようと、現場での実験を重ねた。

また、主室の南窓に設けたアルミエ

キスパンドメタルの大きな庇も、この家においてとても印象の強いデザインだ。既存の下見板張りの外壁とは対比的な素材だが、不思議と調和している。元は既存の小さな庇に代わって、庭と主室をつなぐことを意図して設置された。今後、暮らしの移り変わりに伴って新たにデザインできるような、暫定的なものという認識もあった。

エキスパンドメタルを選んだのは、

雨はさえぎりたいが、庇下の空間を暗くしたくないから。適度な網目によって、少量の雨であればほぼさえぎられ、1階の主室に差し込む光も点状にやわらげられている。アルミの色みも、既存の柱のブルーグレーとの相性がよかった。

空気室のアクリル板と同様、このエキスパンドメタルの厚みや網目の大きさ、角度もまた、現場で検証を重ねて

いる。そしてその検証のなかで、ある取り付け角度と網の太さの際に、網目が一直線に並び、エキスパンドメタルがまるでフラットな板状となって光を反射するようになることを発見した。こうして庇は思いがけず、2階の空気室に自然光を届け、同時に空気をあたためる反射板のような役割を得た。それは同時に、主室の快適さにもつながった。

→2階の窓際。エキスパンドメタルからの反射光が入る。

←主室から庇を見る。エキスパンドメタルの模様が室内に現れる。





2階の空気室に蓄えた光を
アクリル板を通して
1階の主室に届ける。



写真上／2階空気室から
1階を見下ろす。

下／2階空気室。エキ
スバンドメタルから
の反射光で窓際の
天井が明るく照
らされる。

「光のあみ」は
どこにある？

ここまで見てきたような、直射光をやわらげるためのアクリル板への印刷加工、光を粒状に拡散したり、なめらかに反射させたりするエキスパンドメタルの選択から、今村さんと篠原さんには、目指す光の雰囲気は明確にあるのだと伝わってくる。ガラスやアクリル、アルミやステンレスの鏡面仕上げなど、ふたりの師でもある妹島和世さんがマテリアルの使い方によって生み出す光がとても美しく、やはり影響を受けているようだ。

冒頭で触れた「光のあみの家」の由来について尋ねると、今村さんと篠原さん、施主のおふたりから、それぞれ異なる答えが返ってきた。ひとつは最初の印象どおり、エキスパンドメタルと光が外壁に落とす、水面のような網目模様を指しているという。その影は主室のカーテンや床面でも揺らめいて、幻想的な光の景色を生む。もうひとつは、主室から見上げたグレーのアクリルの天井が、プールや海の水の中から見上げたときの、きらきらと輝きながら波立つ水面のようだから。施主たちはその景色から、クラムボン[®]が登場する宮沢賢治の童話『やまなし』の1節「波から来る光の網が（中略）美しくゆらゆらのびたりちぎんだりしました」を想起したそうだ。

「光のあみの家」は、明快なコンセプ



主室。エキスパンドメタルを通過した窓からの光と、アクリルの床を通過した2階からの光。

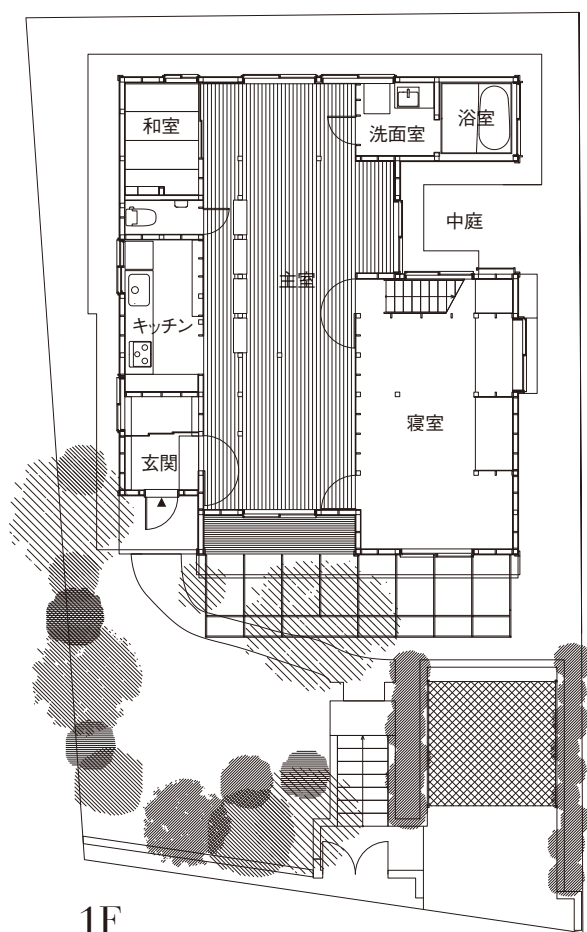
トやシンプルなルールで全体を統べた建築のように、ひとことでずばりと表現することは難しい作品だ。こんなたとえばはどうだろう。今村さんと篠原さんは、それこそ静寂な水面の適所ごとに、強弱をつけて雫を落とし、大小さまざまな同心円状の波紋をつくっていた。今回の「光のあみの家」とは、その波紋がやがて重なりあうことで浮かび上がった「景色」あるいは「現象」のようなものではないだろうか。

あたりまえのことだが、建築家は、空間に光や空気の流れそのものを生み出すことはできない。あくまでつくれるのは建物であり、光や風や環境は、その結果としてついてくる。エネルギーの投入なしには、制御や操作をすることさえ、完璧にはかなわない。

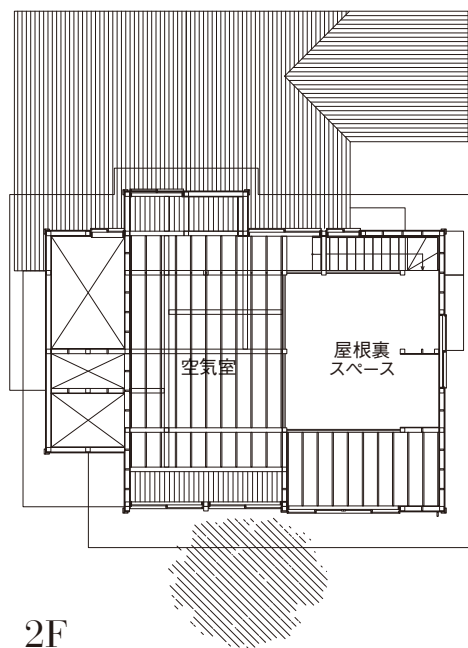
だからこそ、おふたりは、その場所ごとに望ましい光の雰囲気や空気の流れ、温熱の感じ方を明確にイメージし、それに必要なプランニングや設えを、既存の建物と調和させながらデザインしていった。自邸での実体験、事務所が近くて何度でも現場に赴けたこと、リノベーションゆえ実寸のサンプルを使った検証が可能だったこと。さまざまな状況を味方につけて、実直そして丁寧に設計を進めるなかで、今回の光と空間のための仕掛けを発見した。こうして導かれた環境同士がさらに相互に影響しあうことで、予想を超えた諧調をなした。「光のあみの家」は、まさにそんな建築ではないだろうか。

平面図

0 1 2m N
1/175



1F

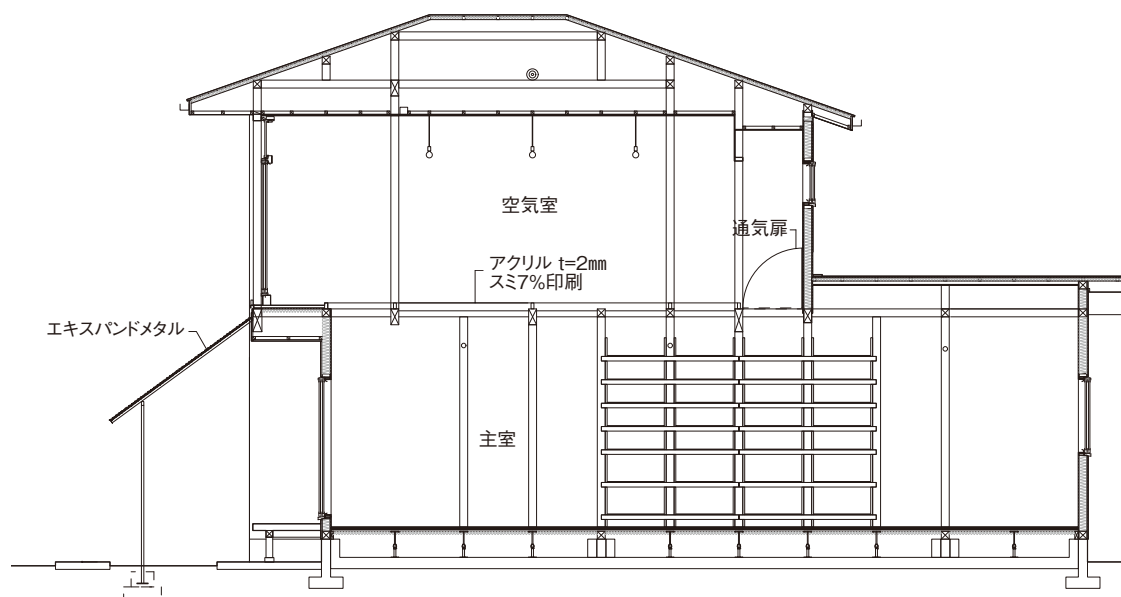


2F

断面図

0 0.5 1m

1/100





光のあみの家

建築概要

| | |
|------|-------------------------|
| 所在地 | 東京都 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 設計 | miCo./ 今村水紀+篠原勲+河合伸昂 |
| 構造設計 | yAt構造設計事務所 |
| 施工 | フジエ工務店、二瓶鉄工、 戸崎鐵工所 |
| 階数 | 地上2階 |
| 敷地面積 | 247.56㎡ |
| 建築面積 | 89.89㎡ |
| 延床面積 | 105.41㎡ |
| 設計期間 | 2019年4月～2021年9月 |
| 工事期間 | 2019年10月～2021年9月 |

おもな外部仕上げ

| | |
|-----|-------------------------------|
| 屋根 | コロニアル(既存) |
| 壁 | 下見板張り(既存) |
| 開口部 | アルミサッシ(既存)、 アルミ樹脂複合サッシ(新設) |
| 庇 | エキスパンドメタル |

おもな内部仕上げ

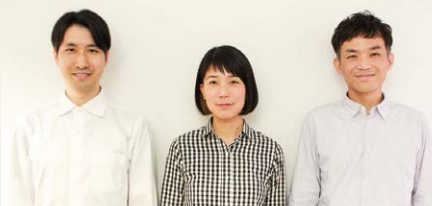
| | |
|----|-------------------------|
| 主室 | |
| 床 | フローリング |
| 壁 | ラワン合板 G-EP塗装、 構造用合板 |
| 天井 | アクリル板 グレープリント、 構造用合板 |

キッチン

| | |
|----|----------------------|
| 床 | フローリング |
| 壁 | ラワン合板 G-EP、 構造用合板 |
| 天井 | 構造用合板 |

空気室

| | |
|--------|-------|
| 床・壁・天井 | 構造用合板 |
|--------|-------|



Kawai Nobutaka Imamura Mizuki Shinohara Isao

河合伸昂 今村水紀 篠原 勲

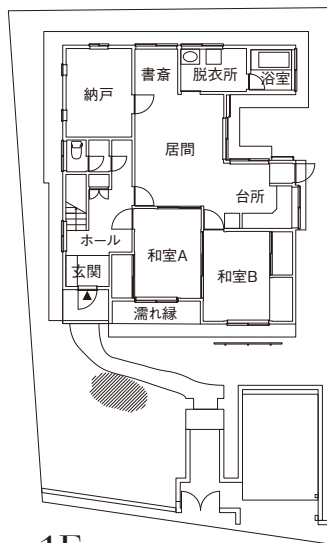
いまむら・みずき／1975年神奈川県生まれ。99年明治大学理工学部建築学科卒業。2001～08年妹島和世建築設計事務所。08年miCo.設立。24年より近畿大学専任講師。しのはら・いさお／1977年愛知県生まれ。2003年慶應義塾大学大学院政策メディア研究科修士課程修了。03～13年SANAA事務所。08年miCo.設立。かわい・のぶたか／1994年岐阜県生まれ。2019年慶應義塾大学大学院理工学研究科修士課程修了。19年～miCo.。

miCo.のおもな作品＝「鎌倉の集合住宅」(2022)、「東玉川アパートメント」(21)、「駒沢公園の家」(11)。

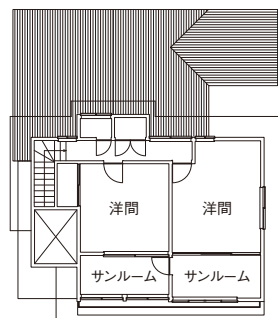
Before

改修前平面図

0 2 4m N
1/300



1F



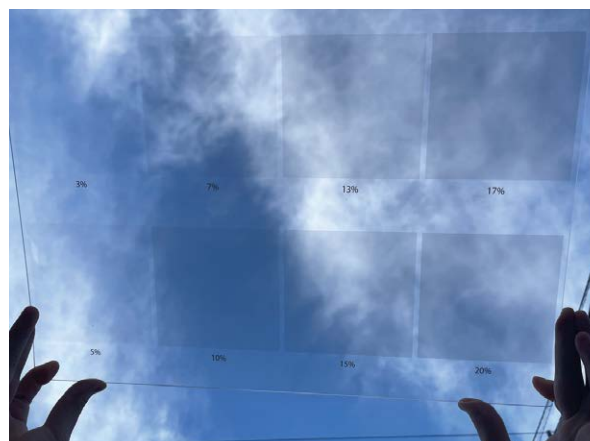
2F

提供／miCo.

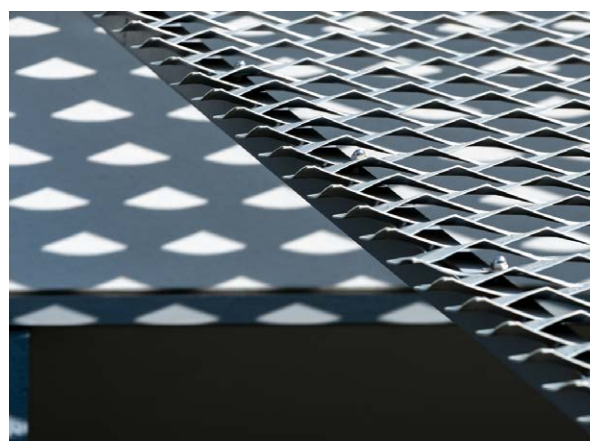


実験

アクリル床の印刷濃度(写真右、7%を採用)やエキスパンドメタルの仕様(写真上)を現地で実験し検討した。



提供／miCo.



エキスパンドメタルの庇のディテール。

その日は、日本からの帰国日だった。空港からそのまま事務所に戻ってきては、「敷地と緑の関係が、うまくない」とサーリネン。トレードマークであるパイプを傾けながら、「もっと、すっきりさせよう」といい、ディア・カンパニー本社の模型に植えられた樹木を取り払っては、自らの手で投げ捨てていった。

サーリネンは、ルイス・カーンやポール・ルドルフとならぶアメリカにおける近代建築の第二世代として活躍した建築家である。サーリネンの特徴は二世の建築家であったことだ。父はエリエル・サーリネンであり、フィンランド近代建築の黎明期に活躍した国家的建築家である。エーロはその偉大な父のもとで育ち、13歳でアメリカに移住し、ミシガン州のクランプルック美術大学にて建築の道を歩みはじめた。建築家として父と比較されることが多いエーロは、アーツ・アンド・クラフツ運動に深く影響を受け、スウェーデンのナショナル・

ロマンティズムを存分に発揮していた父に対して、自らは合理的でモダンなデザインを追求すべく、二世建築家として父と協働しながらも、内心では静かな競争心を燃やして奮い立っていた。そんなサーリネンは第二次世界大戦後のアメリカにおける高度経済成長の波にのりながら、精力的に多彩な作品を世界に残した。

そのキャリアは、父から事務所を引き継いだ1950年には10人だった所員数が、56年には50人となった規模感にも表れているだろう。事務所は2階建てで、20人ほどの「デザイナー」と呼ばれる建築家が下の階にいて、プロジェクトごとにチームが編成されていた。デザイン案がまとまると、上階にいる20人ほどのドラフトマンたちによる実施図面チームへと展開された。そのほかに色彩と家具のデザイナー、ペDESTAL・ファニチャーのためのKnoll（※1）のデザイナーがふたり、プレゼン模型を作成する模型職人、そして青焼きを刷るアシスタントたち、さらには写真家もいた。

サーリネン事務所は、その後多くの有名な建築家を輩出している。ケヴィン・ローチ、ロバート・ベンチュリー、ゲンナー・バーカッツ、シーザー・ペリラ^{たしせいせい}であり事務所内は多士^{たしせいせい}済々だった。サーリネンは、毎週会議室にピンナップされた図面と模型によってデザインを修練させていった。非常に無口な

男で、図面や模型を見て、うなずけばよし、黙って立ち去れば没。そんな彼が言葉を発するときも「ここに、何か、まるいものを」という程度だったため、難解であり自由でもあった。それが彼の作品の幅広さに表れており、多才な後継者が巣立った秘訣かもしれない。

そして、サーリネンが最も好んだのは模型スタディだった。「サーリネンに3次元のアイデアを見せることで、彼を巻き込み、彼を動かす手段だった」とローチが述べたことがあり、膨大な模型スタディを展開した建築家の旗手ともいわれる。なかでもTWAターミナル（※2）の模型写真は膨大に残されている。手描き図面の時代に構想された3次元曲面の建築は、模型スタディを重ねる事務所だからこそ達成できたといわれる。サーリネンの建築は力学的なデザ

インが注目されがちだが、合理性も重要視されていた。アソシエイトだったケヴィン・ローチは、ストップウォッチを持ち出してサーリネンと空港に赴いては、あらゆるものを計測した。飛行機がタキシングする時間、チケットカウンターにおける待ち時間などを測ってまわり、計画に反映させていったのだ。つまり、デザインのなかには多層な意味の合理性が内包された空間として構成されているのである。

サーリネンの創作態度を「建築に献身的」だと多くの協働者は語っている。サーリネンは日夜、土日を惜しむことなく可能な限りの時間を創作に傾けた。教職にも就かなかった。かつてそこに在籍したロバート・ベンチュリーは「現代の事務所は、マーケティングや帳簿づけ、経営に費用の多くを費やしているために、真の建築的問題により多くの時間をかける余裕がありません。仕組みが違っています。それに対して、サーリネンの事務所では、徹底的で芸術的、かつ献身的に仕事をしていました」と述べている。この一文は、かつての職人的なもののづくりの体制を評しているようであり、かつ時勢に対する評にも読めるが、思い返せば、二世建築家として前近代の時代に建築の本質と対峙した父の背中を眈眈と観察していたエーロ・サーリネンだからこそ貫徹することができた、膨大で非合理的なスタディを突破してのみ達成しうる合理的なデザインの極致を物語っているともいえるだろう。



TWAターミナルの模型に入り込むスタッフ。

エーロ・サーリネン
Eero Saarinen

1910年フィンランドのキルッコスミにて誕生。13歳のときにアメリカに移住し、父エリエル・サーリネンが教鞭をとるミシガン州のクランプルック美術大学にて建築を学ぶ。ここでチャールズ・オーモンド・イームズ^{Jr.}と邂逅。パリ留学やイエール大学での勉強を経て、30年に父が共同設立したサーリネン・スワッソン・アソシエイツに入り、父が他界した50年からエーロが引き継ぎ、53年にエーロ・サーリネン・アンド・アソシエイツ・オフィス・ビルディングをブルームヒルズのウェスト・ロングレイクロードとウッドワード・アヴェニューの交差点に設立。61年コネチカット州ハムデンへ移転中だったが、そのさなかに他界。

やまむら・たけし／1984年山形県生まれ。2006年早稲田大学理工学部建築学科卒業。同年バルセロナ建築大学留学。09年早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。12年同大学院博士後期課程修了。12～15年ドミニック・ペロー・アルシテクチュール勤務。16年YSLA Architects設立。早稲田大学専任講師などを経て、20年東京工芸大学准教授。博士（建築学）、一級建築士。

※1 Knoll（ノル）：1938年にニューヨークで設立された世界的な家具ブランド。多くの建築家やデザイナーとコラボレーションをしている。

※2 TWAターミナル：ジョン・F・ケネディ国際空港にあるトランス・ワールド・エアラインのターミナル（1962年）。現在はTWAホテルになっている。エーロ・サーリネンの代表作のひとつ。

古写真で
みる
建築家の
アトリエ

第7回

古写真を発掘し、
昔の建築家の
アトリエをのぞく。
この場所で、
名作が生まれた。

事務所の 立役者は スタディ用の模型

文／山村 健
Yamamura Takeshi

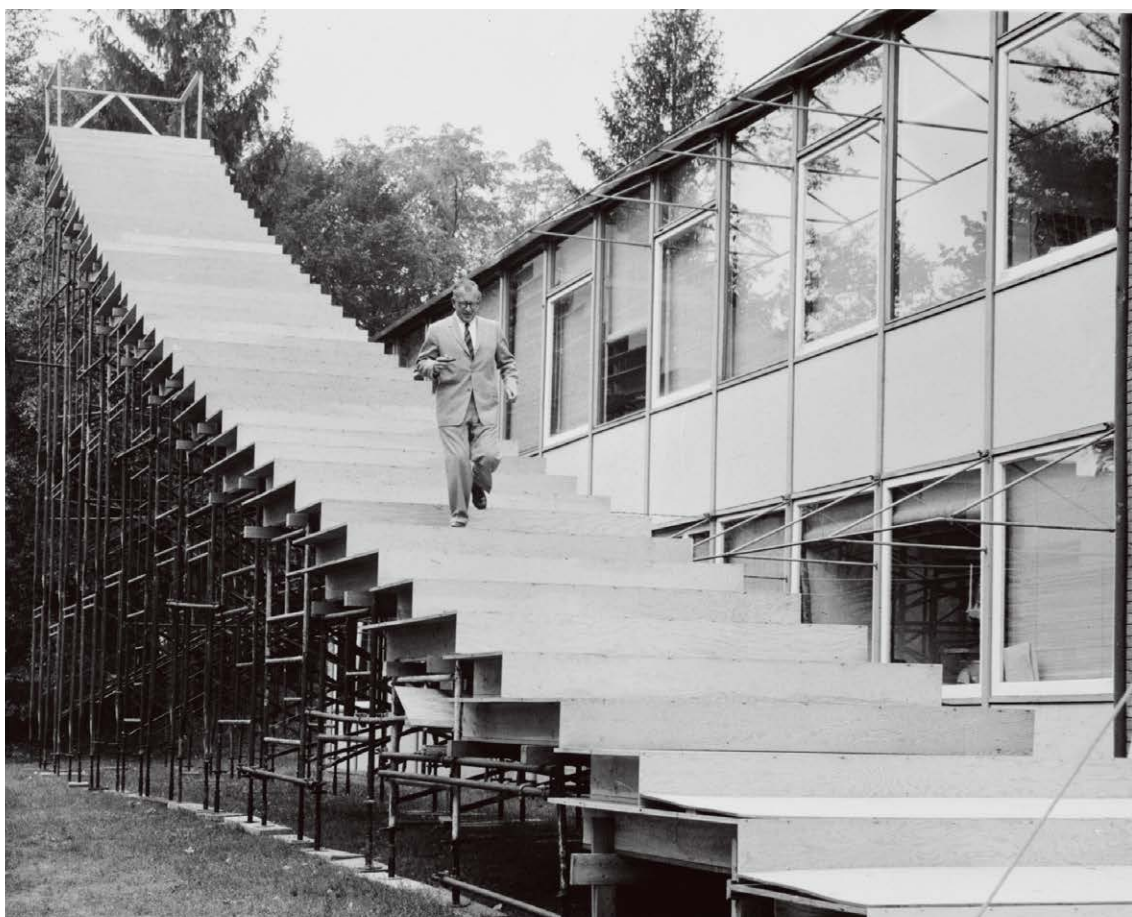


写真4点、©Balthazar Korab / Library of Congress

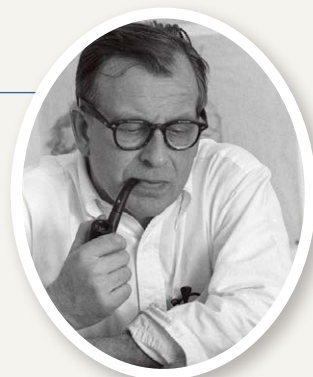
事務所の裏にて、TWAターミナルの階段を原寸モックアップで確認するサーリネン。

エーロ・サーリネン

Eero Saarinen



TWAターミナルの模型スタディ。奥にサーリネン。



反 在 宅 的

1
1 / ここから沈む
ように入っていく。

栗津邸 設計／原 広司

Hara Hiroshi × Fujimori Terunobu



住

宅

現代
住宅
併走

第五十八回

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

連載

写真／普後 均

原広司のポートレイトをのぞく。



原

さんには、丹下健三後の日本の建築を考えるうえでひとつの謎がある。

「なんで、菊竹(清訓)でも横(文彦)でも磯崎(新)でも黒川(紀章)でもなく、デビュー当初は住宅や幼稚園のような小さくて私的な建物しかつくっていなかった原広司が、歴史が一段落してみると、J.R京都駅ビル(1997)や大阪の梅田スカイビル(93)のような時代と社会の記念碑的大作を残すことに成功したのか」

などなど思いながら、初期の小住宅(粟津邸)を訪れた。駅に降りて丘を上ったり下ったりしながら近づく、ありふれた郊外住宅の一面に奇妙な外観の建物が見えてくる。斜面からコンクリートの構造物が伸び出しているが、窓や出入口がほとんど目立たないから、水道施設のようにしか見えない。

竣工当初とは反対側の道からアプローチしてしまったから非常時給水場のようだったが、昔の正規の道からアプローチすると普通の人はもっと当惑するだろう。なんせ、家の前に立っても家は見えず、足下から水平の構造物が斜面の下側に向かって生え出しているからだ。当時の原さんに大地との一体化という意識があったとも思えないが、狭い階段をトントンと下りるとそこが玄関。



4

4 / 右手の斜面が庭。

大地との一体化という考えはなかったとしても、地の中に潜るにも似た思想はもっていた。それが有孔体の思想で、この思想を過激に実践した「伊藤邸」(67)をこのシリーズ(TOTO通信)1998年Vol.2で訪れたとき、次のように話してくれた。

「自閉した空間、死んだ空間は、そこに孔があくと、光が入り、空気が流れ、人が動いて、生きはじめる。だから建築の空間で大事なのは孔。それが有孔体理論の出発点だナア」

伊藤邸が出現したのは1967年、東孝光の「塔の家」(66)の翌年にあたり、この二作の出現で戦後住宅の潮目は変わり、それまでのピロティと大窓のふ



3

3／道路から見る。
これが家とは思えない。



5

5／左右から動線
が流入する。小さな
立方体が目立つ。
6／中途階の部屋。

6

現代住宅 併走

Hara
Hiroshi
×
Fujimori
Terunobu



8



7

7／突き当たりの
九間（このま）
の場への最後の階
段。
8／7を下から見
上げる。

たつにより都市と社会に向かつて開く家から、厚い壁と小さな窓によって外に対して閉じる家へと向かった。そしてその延長線上に「住吉の長屋」(76)の安藤忠雄や伊東豊雄といった自閉

性住宅に立てこもっては出撃する「野武士」の世代が出現している。

今はなき伊藤邸は、中に入ると主室はほぼ閉じられた空間で、壁と天井にあいた孔から差し込

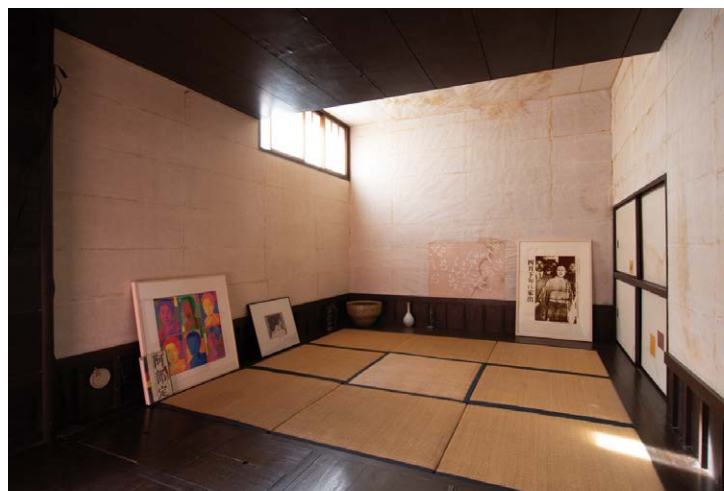
性住宅に立てこもっては出撃する「野武士」の世代が出現している。



9 庭の反対側には厨房、トイレが配されている。

10 原さんが決まってる四畳半の和室。

10



む光が人や家具を薄暗いなかに浮かび上がらせていた。

その伊藤邸から5年後の1972年に完成したこの家のドアの向こうにはどんな室内が待ち受けているのか。外から眺め下ろすと、屋根はポールト状のトップライトになっているから伊藤邸のような洞窟状ではないとはわかっていたが、戸を開け中に入ると、予想を超えた空間が広がっている。

まず明るい。ポールト状ガラス天井からの直射日光が室内の凸凹の隅々までまわり込み、室内というより野外のよう。その野外のような室内の中央に狭い階段が通され、沈むようにして先に進むと、左右からの動線が合流してくる。

室内の明るさと閉鎖性は過激有孔体の伊藤邸とは正反対だが、有孔体の本質をなす自閉性は、全体プランを両側のコンクリートの壁の内側に押し込んだことで守られており、屋根だけをパツカリ開けた形をとる。

両側に壁が立つなかを、中央に動線が伸び、両側から副動線が合流し、ひとつになつて下りつつ進む。そして上には青空。こんな変わった全体計画は建築にはないが、地形にはあつて、谷。日本最大の谷地形として知られる伊那谷は原さんの故郷なのだ。

東に南アルプス、西に中央アルプスというふたつの山脈に隔てられた真ん中を天竜川が流れ、両側に谷間が続くことまでは、

天竜川の源となる諏訪地方で育ったからよく知っていたが、かつて原さんから「伊那谷の本当の魅力は、その大きな谷に両側の山脈の小さな谷々が合流してくるところなんだ」と指摘された。

伊那谷の一件について続けると、JR京都駅ビルができたとき、伊那谷のよう」と建築史家は書き、建築家は「歴史家はすぐそういうことを言う」とかわしたが、人の身体が食べてきたものでできているのと同じように、人の視覚も見てきたものでできている、とするなら、原さんの設計に伊那谷の光景が自ずと染み出すのは、当然のこと。先に進む。谷筋のような階段を下りていくと、広い主室に

流れ込んで止まる。止まってから来たほうを振り返って思う。狭い通路の両側に、なんであんなに大小の直方体的造形が積み木のように詰め込まれているのか。

原さんによると、「その頃、住宅のような小さなものしか頼まない自分に比べ、大きな公共建築や都市的広がりのある計画をやるほかの建築家が羨ましかった。そこで、外の都市的なものを反転して住宅のなかに取り込もうと考えた」。

谷

間のような構成が流れ込んで止まる主室は、コンクリート打放しの

箱状のつくりで、平面はおおよそ3間四方の正方形。3間四方の正方形を古来日本では九間といひ、吉村順三によると人が集まるのに狭くも広くもなく最適なヒューマンスケールの広さというが、九間を意識したわけではないことは高さから明らかだろう。吉村が最適というのは高さが1・5間の場合で、こんなに高くてはヒューマンスケールを大きく超えてしまい、ガランドウと化する。

あらためて振り返ると、この家は外も中もヒューマンスケールを看取できない。印象深い立方体は、どれも、身体に比べ大きすぎるか小さすぎるか、ヒュー



11

11 子ども室。

「マンスケールを拒んでいるとは思えない。原広司の住宅は、谷のような構成といい、反ヒューマンスケールの立方体といい、日々の暮らしを容れる器にはおよそ向いていない。こうした反住宅の本質を、住宅という小さなフラスコの中で試し確かめ、体得し、建築家としての大きな構えを変えぬまま、その時を待ったにちがいない。そして、その時が、JR京都駅ビルや梅田スカイビルだったのではないだろうか。余談をひとつ。栗津さんの子息のケンさんと一緒に原さんのアトリエを訪れ、あれこれかがったなかで、一番好きな絵はキリコの通りのメランコリーだと言う。通りに落ちる影が主役の不思議な絵である。



庭から見たキリコの絵の
ようなヘンな外観。

栗津邸

建築概要

| | |
|------|--------------|
| 所在地 | 神奈川県川崎市生田 |
| 主要用途 | 住宅+アトリエ |
| 設計 | 原広司+アトリエ・ファイ |
| 施工 | 遠藤建設 |
| 敷地面積 | 602.0㎡ |
| 建築面積 | 164.0㎡ |
| 延床面積 | 256.4㎡ |
| 階数 | 地上2階(一部塔屋3階) |
| 構造 | 鉄筋コンクリート造 |
| 竣工年 | 1972年 |
| 図面提供 | アトリエ・ファイ |

原 広司

1936年、川崎に生まれ、信州の伊那谷の飯田で育つ。59年、東京大学を内田祥哉に学んで卒業し、70年から設計活動をアトリエΦ(ファイ)と協働。67年のデビュー作「伊藤邸」は、それまでの戦後モダニズム住宅とは理論も姿かたちもまったく異なり、当時の学生たちに衝撃を与えている。

著書『建築に何が可能か』も、本当はわかりやすいが、文も論理も難解で、わからないまま読むのが当時の学生には喜びだった。



写真／©新井卓 Hara Hiroshi

藤森照信

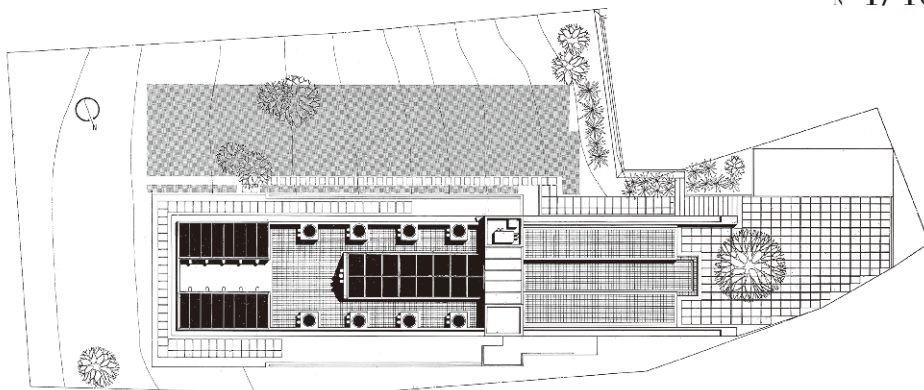
建築家。建築史家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。工学院大学特任教授。おもな受賞＝『明治の東京計画』（岩波書店）で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』（筑摩書房）で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸（ニラ・ハウス）」（1997）で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」（2000）で日本建築学会作品賞、「ラコリーナ近江八幡草屋根」（15）で日本芸術院賞。



Fujimori Terunobu

配置図

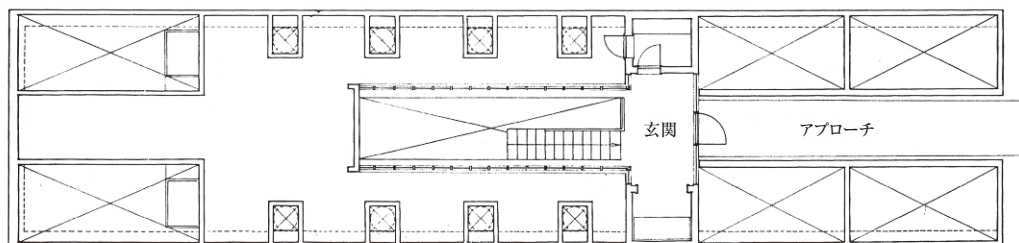
屋上



0 2 4m
N 1/400

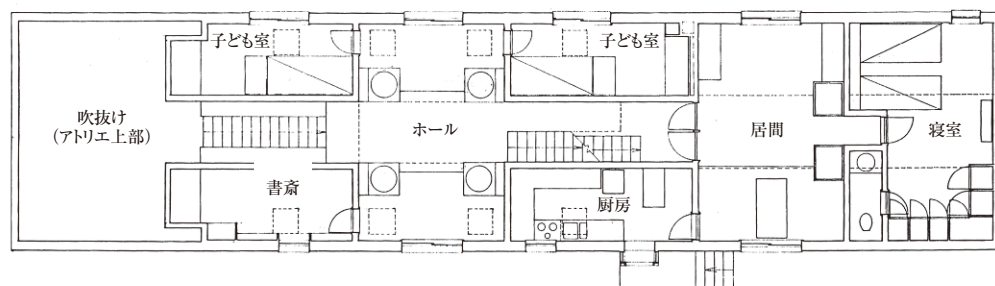
平面図

アプローチ階

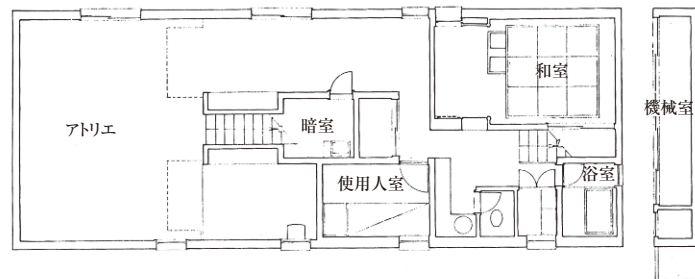


0 1 2m
N 1/200

2階



1階



併住現 走宅代

Hara Hiroshi
×
Fujimori Terunobu

麻布台ヒルズ

Azabudai Hills



外観。タワーや低層棟などの複数の建築群。

広大なエリアに立ち並ぶユニークなトイレたち

森ビルが主導する巨大再開発として注目の麻布台ヒルズが2023年11月、開業を迎えた。東西に長く高低差のある約8.1haの広大なエリアには、日本一の高さ約330mの森JPタワーをはじめ、高層レジデンス、ホテル、商業施設、インターナショナルスクールなどが立ち並ぶ。開発コンセプトは「緑に包まれ、人と人をつなぐ『広場』のような街」。低層部の屋上を含む約2万4000㎡の緑地を確保すること、自然あふれる憩いの場を創出。各施設をつなぐ約6000㎡の中央広場は、まさにコンセプトを体現する街の中心地といえる。

オフィスワーカーの拠点に プレイヤーズルーム

今回おもに取材したのは、森

JPタワーのオフィスの水まわり。森ビル設計部・建築設計担当の増沢唯さんによれば、麻布台ヒルズでは働く人のウェルネスを実現するため、緑豊かな外部空間も含め、街全体がワークプレイスになるような場と仕掛けを考えたとのこと。そんな森ビルの考え方を象徴するオフィスワーカーのための拠点が、33〜34階に設けた約1000坪の「ヒルズハウス」だ。ここは企業の垣根を越え、ワーカーが集うクラブハウスのような場としてつくられた。一部は森JPタワーを中心に、働く人を対象とした会員制エリアになっており、ラウンジ、カフェテリア、会議室、個室ブースなど、多様な場が用意されている。インテリアデザインは高橋紀人さん率いるジャモアソシエイツ。

「この場で個人と個人がつながり新たなコミュニケーションが



ヒルズハウスのワークラウンジ。



オフィス基準階の執務室。

生まれ、仕事以外の時間を充実させ、明日への活力を満たす場になることを期待しています」と増沢さん。当初からヒルズハウスの企画に携わってきた森ビルオフィス事業部の土山怜美さんも「麻布台ヒルズの中にはフィットネス、予防医療センターなど多様な施設があるので、今後ここを拠点にそうした機能を横につなげ、麻布台の街を最大限活用していただくためのさまざまな仕掛けを準備中です」と語る。

さて、そのオフィス共用施設の最先端ともいべきヒルズハウスのトイレはというと、「ヒルズハウス全体が目指したのが、奇をてらわず、普遍的で心地いい空間ですから、それをそのまま踏襲しようと考えました」と語るのは、インテリアデザインを担当したジャモアソシエイツの小山昌之さん。とくに入口に

近い洗面コーナーは、最もプライベートなゾーンである大便器ブースとパブリックゾーンをつなぐ「セミパブリックゾーン」と位置づけ、素材や色調を極力ヒルズハウスの内装に近づけたという。確かに、男女トイレとも床は同じベージュ系のテラゾータイルで共用廊下とシームレスにつながり、内部も木調シートを多用するなど、明るく温かな印象が連続。床材は奥の大便器ブース前に至るとグレーに切り替わる。

また、見逃せないのは女性トイレの奥にある「レディースルーム」という名の、洗面台と椅子を備えた小さな個室。土山さんによれば、社内のヒアリングなどで、女性には月経・産前産後・更年期などによる体調不良、着替え、歯磨き、搾乳など、個室を使いたいニーズが結構あり、むしろ便器がないほうが利用し



男性トイレ



洗面コーナーに三角形のモザイクタイル。



個室



書類などが置きやすい低いライニング。

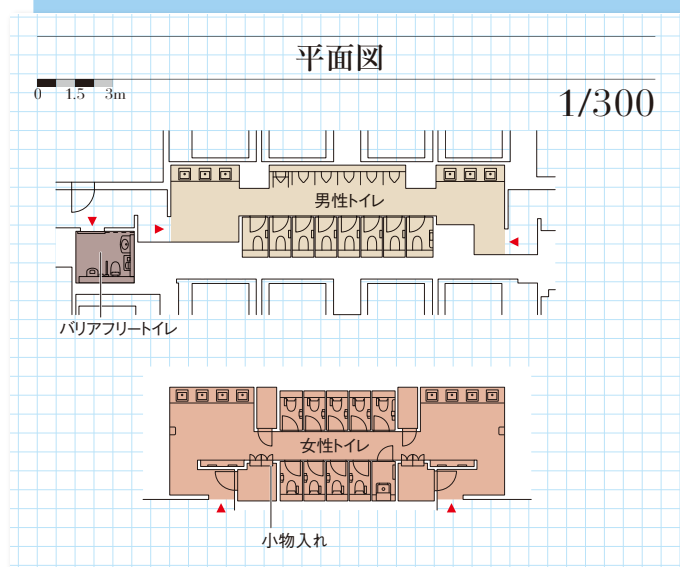


パウダーコーナーの横に、歯ブラシなどを収納可能な小物入れ。

オストメイト対応。フィッティングボードなども備えている。



女性トイレ



バリアフリートイレ



個室



男性トイレ

車いすなどに対応。男女の色分けをしないサイン。



トイレ全体がリラックスできる間接照明になっている。

祈禱のための部屋。タイルカーペットはメッカの方向の角度で貼られている。



木調など、オフィスのなかでも心地よい空間になるようにしている。



バリアフリートイレ



プレイヤーズルーム

やすいのではないかと考え、新しい試みとして設けたとのこと。使われ方次第で可能性が広がっていきそうだ。

さらにもうひとつ、要注目スペースが多機能トイレの奥にある「プレイヤーズルーム（祈禱室）」。最近、空港や駅では見かける機会が増えたが、オフィスビルではまだ珍しい。土山さんいわく、「従業員にムスリムの方がいらつしやる企業は増えていますが、まだテナントが自力で専有部に設けるほどではない割合です。それなら、こういう共用施設の中であれば需要はあるにちがいないと、こちらで用意することにしました」。

ムスリムは1日5回、やむなく簡略化する場合でも日中最低1回は礼拝を行い、しかもその前に体を水で清める「小浄」と呼ばれる行為が不可欠。手や顔だけでなく足も洗うため、それなりの水まわり設備とスペースが求められる。デザインを手がけた小山さんは「約2m角の最小限のスペースで、手足を洗って、拭いて、祈るという一連の流れを想定しながら、バズルを組み合わせるように考えていきました」と振り返る。動線がスムーズでないと、せっかく洗った足で長い距離を歩くことになり、清めた意味も薄れかねない。試行錯誤の末、完成したのが写真のプレイヤーズルームだが、ヒルズハウス全体とのデザイン

ヒルズハウス



レディースルーム

便器はなく、個別に洗面
やソファが設置された個
室。



女性トイレ

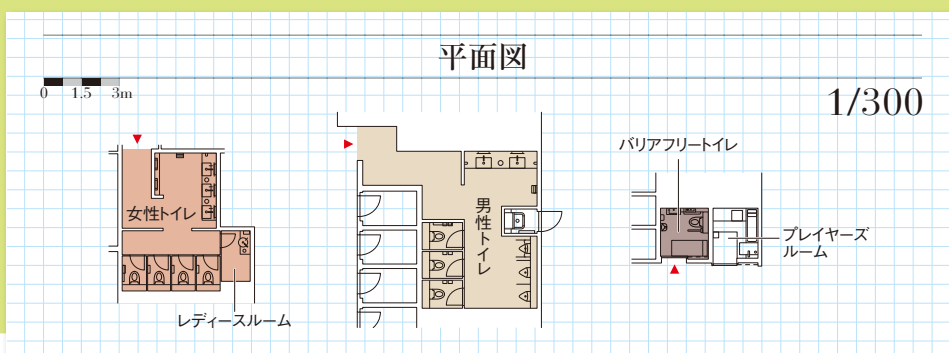
リラックスできる空間に
するため、個室の前とは
床材を変えている。



右手に個室、左手に洗面
コーナー、奥にレディー
スルーム。



洗面・パウダーコーナー



の親和性はもとより、機能的にも非常によくできている。靴を脱ぐことを想定して祈りの場は一段高くし、椅子に座ったまま足が洗えるように洗い場を確保。向きを変えれば目の前が礼拝の場で、床は頭や膝をつくことを考え、クッション性とメンテナンス性を兼ね備えたタイルカーペット敷き。しかも、矢羽根張りのカーペットがさりげなくメッカの方向を指しているという、なんともスマートな配慮だ。今後、ミニマムなプレイヤーズルーム設計のお手本になっていくのではなからうか。

オフィスの
広さがわかる
奥行きの長いトイレ

次に、1フロア約4800㎡というスケールのオフィス基準階を見学した。設計を担当した日本設計の加藤弘治さんは、当初から森ビルのフラッグシップオフィスにふさわしい、明るくシンプルで飽きが来ない「上質なスタンダード」をキーワードにデザインしたと語る。とくに意識したのが低層部のデザインとのつながりで、「多くのデザイナーが手がけた内外装のデザインが、オフィス基準階まで違和感なくシームレスにつながるデザインとなるよう考えました」と加藤さん。

トイレの内部もヒルズハウス

チームラボボーダレス

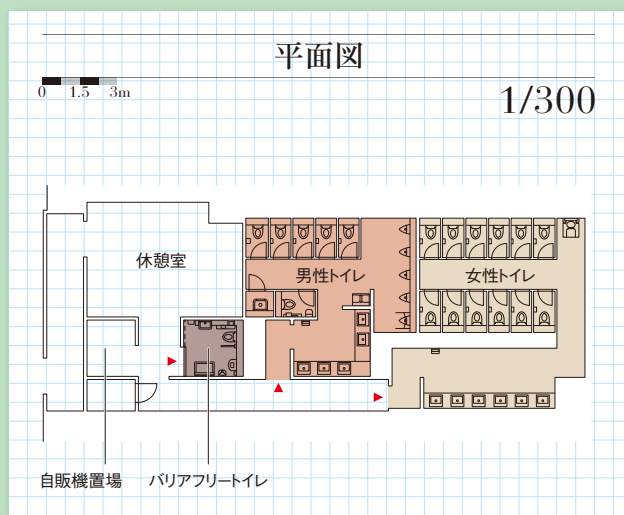
Azabudai Hills



女性トイレ



バリアフリートイレ



多くの利用者が想定されるため、12ある個室が両側に並ぶ。



オストメイト対応。ベビーシートなども設置されている。

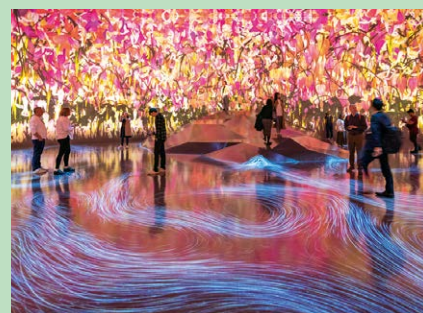
全体に黒い内装で統一されている。色鮮やかな展示を見た後に目を休めるためか。



展示風景。さまざまな色彩にあふれアートに没入していくような作品群。



男性トイレ



麻布台ヒルズ

Azabudai Hills



オフィスが入る森JPタワーの外観。

建築概要

| | |
|------|--|
| 所在地 | 東京都港区虎ノ門1-3-1、ほか |
| 事業主 | 虎ノ門・麻布台地区市街地再開発組合 |
| 主要用途 | 事務所、住宅、店舗、ホテル、文化施設、インターナショナルスクール、診療所など |
| 設計 | 森ビル、日本設計、日建設計、山下設計 |
| 施工 | 清水建設、三井住友建設、大林組 |
| 敷地面積 | 約63,900㎡ |
| 建築面積 | 約37,100㎡ |
| 延床面積 | 約861,700㎡ |
| 階数 | 地下5階、地上64階(森JPタワー) |
| 高さ | 約330m(森JPタワー) |
| 構造 | 鉄骨造、鉄筋コンクリート造、 鉄骨鉄筋コンクリート造 |
| 設計期間 | 2017年9月～2019年7月 |
| 施工期間 | 2019年8月～2023年6月(一部施工中) |

おもなTOTO使用機器

● オフィス基準階
腰掛式フチなしトイレ便器(壁掛式) CS573P
大便器自動フラッシュバルブ TEVN46-1B(特注品)
ウォシュレットP TCF587Y
壁掛壁排水自動洗浄小便器 US900R
ベッセル式洗面器 LS717CM
台付自動水栓 TENA61A1X1X(特注品)
フラットカウンター多機能ユニット XPUTNDXD

● ヒルズハウス
腰掛式フチなしトイレ便器(壁掛式) CS573P
大便器自動フラッシュバルブ TEVN46-1B(特注品)
ウォシュレットP TCF587Y
壁掛壁排水自動洗浄小便器 US900R
ベッセル式洗面器 LS717CM
台付自動水栓 TENA61A1X1X(特注品)

● チームラボボーダレス
腰掛式フチなしトイレ便器(壁掛式) CS573P
大便器自動フラッシュバルブ TEVN46-1B(特注品)
ウォシュレットPS2n TCF5524Y
壁掛壁排水自動洗浄小便器 US900R
ベッセル式洗面器 LS717CM
台付自動水栓 TLE32008J



Masuzawa Yui

増沢 唯

森ビル株式会社
設計部
建築設計2部
建築設計1グループ
チームリーダー



Tsuchiyama Rumi

土山 怜美

森ビル株式会社
営業本部
オフィス事業部
営業推進部
企画グループ



Hosoe Izumi

細江 いずみ

森ビル株式会社
設計部
設備設計部
設備設計1グループ
チームリーダー



Kato Koji

加藤 弘治

株式会社
日本設計
執行役員
第3建築設計部長



Koyama Masayuki

小山 昌之

有限会社
ジヤモアソシエイツ
顧問

同様、共用空間全体のイメージをそのまま持ち込んだような、明るく居心地のよい空間だ。男女トイレともに両サイドに通リ抜け可能で、その長さにあらためて基準階の大きさを感じる。

ちなみに、森JPタワーは国際的な環境性能評価システムLEEDのうち、建物の設計・施工を対象とする「BD+C」で最高位のプラチナ認証を取得予定だが、森ビル設計部・設備担当の細江いずみさんによれば、取得には水まわり設備の節水化が大きく貢献しているという。給湯室、手洗い自動水栓の節水を図る際は、水量の使用感という観点も重要となる。そのため、

採用する水栓について水量の体感検証実験を行い、どこまでなら節水可能かを確認して水量を決定したそうだ。ビル全体の器具数を考えれば、馬鹿にならない節水量にちがいない。

洗面コーナーといえば、壁面に貼った三角形のモザイクタイルが目玉だが、加藤さんによれば、ビルの外苑東通り側エントランスのガラス大庇のデザインに着想を得て、韻を踏んだものだという。堅い印象になりがちなオフィスのトイレに、動きとはなやかさをもたらしている。「これまでオフィスの設計をいくつも手がけてきましたが、テナントさんがオフィスを選ぶ際

に重視するひとつがトイレです。予算も広さも限られたなかで、どのように特徴的で心地よいトイレ空間をデザインするかはとても重要だと考えています」と加藤さんはしめくくってくれた。

はなやかな世界を見た後の目と心を休めるトイレ

最後に、低層部の一角にある話題のスポット「森ビルデジタルアートミュージアム・エプソンチームラボボーダレス」のトイレを取材した。お台場から移したばかりで、地下にある施

設は没入感満点。「地図のないミュージアム」のキャッチフレーズどおり、複数のコーナーに分かれた施設全体が迷路のようにつながっており、トイレもその途中にある。

トイレ内は漆黒の世界。手前にソファを置いた休憩コーナーがあり、その奥に続く黒い布張りの壁と絨毯に囲まれた廊下を経てトイレに行き着くと、内部も黒を基調にした空間で、白いカウンターと機器類が浮かび上がる。徹底した無彩色の内装は、光と色と音が飛び交う世界を見た後の目と心を休めるには、最適のようにも思えた。

ところで、ミュージアムの強

烈な印象もさることながら、インタビュ어의最後に出た男性トイレの話も印象に残った。オフィス基準階の男性トイレの大便器ブースが多めなのは、最近スマートフォンを見る人が多いせいなのか、男性の待ち行列ができる例が珍しくないからだという。

今回レディースループやプレイヤーズルームなど、多様な個室を取材したが、未来のトイレは多目的化がいつそう進み、便器、洗面器、シャワーなど、さまざまな水まわり機器や家具を備えた個室群から好みの個室を選ぶ場へと変貌する日が来るのかもしれない。

生きた全体

A Living Whole

2023年度に日本建築学会賞を受賞した児童遊戯施設「シェルターインクルーシブプレイス コパル」をはじめ、
個を出発点に、多様な価値観が重なりあい、全体を包摂するような建築に取り組む
大西麻貴+百田有希 / o+hの展覧会を開催します。
本展では、彼らの作品や人の営みが織りなす「生きた全体」が
どう建築の風景として立ち上がってくるのか、模型や言葉、インスタレーションなどで紹介します。

生きた全体 A Living Whole

ひとつの建築をつくるとき、
その建築を含む「生きた全体」を
どのように考えられるでしょうか。

物と営み、空間と時間にまたがる
「生きた全体」を、私たちは以下の4
つの切り口でとらえています。

営みの全体

建築をつくるという営みは、私たちが生きることそのものです。その場所にふさわしい建築を、人々とともに掘り起こし、考え、つくり、育てていく。私たちは、そうした営みをも含めた全体を、建築だととらえています。それは、物としての建築を否定することではありません。むしろ物と営みの双方をも含めた全体として、立ち現れる建築の創造力を広げていきたいのです。

空間的全体

建築をつくると、その内側にひとつの世界が生まれます。一方で、建築はその外側の世界にとっての一部です。もしも建築が、内側と外側の世界をつなぐ存在となりえるならば、小さな居場所から大きな環境までを、連続的にとらえることができます。のではないのでしょうか。ひとつの

物があるとき、その「個」は固有な存在です。いくつかの固有な「個」が集まって、それらが身体的に計測できる数であれば、その集まりには多様さがあるといえるでしょう。しかし、さらに数が増えると全体は均質になり、集まりの多様さは失われます。その際、均質となった全体の内に、新たなまとまりを見出し、より大きなスケールでの「個」を生み出していくことによって、再び周囲と多様な関係を築いていくことができるのです。そのように、建築をつくることは、私たちの世界のなかに、スケールに合わせたまとまりを見出し、単体では取り出せないひとつながりの関係性を生み出していくことです。

時間的全体

建築は、今日の前にあるものとしてだけではなく、過去、そして未来の建築とともに存在しています。それゆえに、ひとつの建築のなかには過去と未来の人々の生が含まれます。建築の材料ひとつにもまた、土地の一部として育まれてきた長い時間が内包されています。かつて民家が、その土地の風景と分かち難く一体であったのも、その家が背後の山々で育った木や竹、土地固有の石や土、

そしてそこで暮らす人々の手によってつくられていたからでしょう。
そのように、過去、現在、そして未来の人々、さらにはその土地の時間とつながる建築を、私たちは今、どのようにつくることができのでしょうか。

存在の かけがえのなさ

建築を含む「生きた全体」を考えるとき、私たちは、建築を自然から離れた人工物というよりは、生き物としてとらえるところから始めてみたいと思います。人間にコントロールされるものとしてではなく、自立した存在として建築と向きあうことで、その存在を機能や性能で測ることを超え、欠点や未完成な部分も含めて愛しみ、育てていくことができます。建築を生き物ととらえる視点、は、建築の存在論的意味を問い直す試みです。

ひとつの建築をつくるとき、その建築を含む「生きた全体」をどのように考えられるでしょうか。その問いを、展覧会を通して多くの人々とともに、考えつづけていきたいと思っています。

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY・MA

次回 予告

吉村靖孝展(仮)

法規から都市を読み解く『超合法建築図鑑』(彰国社)、輸送コンテナを居住空間にした「EX-CONTAINER」、建築を不動産と動産のあいだとらえた「半動産建築」など、鋭い切り口とユニークな手法で社会と建築の関係構築を試みる吉村氏。今回も斬新な手法で吉村建築を表現します。

2025年1月16日(木)～3月23日(日)



TOTOギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03(3402)1010
ファクス／03(3423)4085
開館時間／11:00～18:00
休館日／月曜日・祝日、
夏期休暇、年末年始、展示替え期間
入場料／無料
アクセス
●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車 8番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車 4a番出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・
半蔵門線、都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分



TOTO GALLERY・MA

<https://jp.toto.com/gallerma>

会期／2024年9月4日(水)～11月24日(日)

大西麻貴+百田有希 / o+h

onishimaki+hyakudayuki / o+h



© Yuka Kano

大西麻貴 Onishi Maki

おおにし・まき／1983年生まれ。2006年京都大学卒業。08年東京大学大学院修士課程修了。08年～大西麻貴+百田有希 / o+hを共同主宰。16年～京都大学非常勤講師。22年～横浜国立大学大学院Y-GSA教授。

百田有希 Hyakuda Yuki

ひゃくだ・ゆうき／1982年生まれ。2006年京都大学卒業。08年同大学大学院修士課程修了。08年～大西麻貴+百田有希 / o+hを共同主宰。09～14年伊東豊雄建築設計事務所勤務。17年～横浜国立大学非常勤講師。

おもな作品に「シェルターインクルーシブプレイス コバル」(山形県、22年)、「Good Job! Center KASHIBA」(奈良県、16年)、「二重螺旋の家」(東京都、11年)など。おもな受賞に2023年日本建築学会賞(作品)、BCS賞など。

© opal



シェルター
インクルーシブプレイス
コバル(外観)
(山形県、2022年)

© opal



シェルター
インクルーシブプレイス
コバル(内観)
(山形県、2022年)

© Yuma Harada



Good Job! Center KASHIBA
(奈良県、2016年)

© Takumi Ota



熊本地震 震災ミュージアム KIOKU
(熊本県、2023年)

reddotデザイン賞2024、iFデザイン賞2024にて2商品受賞

右の商品2点が、国際的なデザイン賞「レッドドット・デザイン賞2024(*1)」と「iFデザイン賞2024(*2)」を受賞しました。レッドドット・デザイン賞は12年連続受賞、iFデザイン賞は11年連続受賞となります。TOTOは、引きつづきデザインとテクノロジーの融合を追求し、TOTOらしい商品をグローバルに広くご採用いただくことで、「持続可能な社会」「きれいで快適・健康な暮らし」の実現に貢献していきます。



*受賞対象に専用大便器は含まれていません。

レストルームドレッサー プレミアムシリーズ

ウェブ→
<https://jp.toto.com/pages/design/>



*1 レッドドット賞：1955年から続く国際的権威あるデザイン賞。主催はドイツ・エッセン「ノルトライン・ヴェストファーレンデザインセンター」。デザイン専門家が革新性、機能性、品質を厳正に審査し認められた商品に贈られる。



クリーンドライ(吸引・高速両面タイプ)

*2 iFデザイン賞：1953年から続く国際的権威あるデザイン賞。主催はドイツ・ハノーバー「iFインターナショナルフォーラムデザイン」。デザイン専門家が美しさ、機能性、革新性を厳正に審査し認められた商品に贈られる。

『魚谷繁礼建築集』発売フェアのご案内

Bookshop TOTOでは、TOTOギャラリー・間で開催の「魚谷繁礼展 都市を編む」の展覧会に合わせ、著者直筆の限定サイン本を含めた書籍フェアを開催中です。またナイトツアーなどのイベントに合わせて、開館時間を延長しています。TOTO出版の僅少本もあります。詳細はWEBサイトよりご確認ください。ぜひご覧ください。

ウェブ→
<https://jp.toto.com/bookshoptoto/fair.htm>



今年で20回目!トイレにまつわるエピソードを川柳に募集期間は2024年6月17日(月)~8月25日(日)

今年で20回目をむかえる「第20回トイレ川柳」。今年もトイレでの面白話、思い出などトイレにまつわるエピソードを募集しています。審査員の仲畑貴志氏は、日本を代表するコピーライターで、毎日新聞の人気川柳コーナーの選者としても知られており、第1回目より「トイレ川柳」の審査員を務めています。「ネオレスト賞(最優秀賞)」のほか、独創的な句を選出する「仲畑貴志賞」や、小学生以下を対象とした「キッズ賞」、中学生・

高校生を対象にした「中学生・高校生賞」なども設けています。みなさまの思わず笑顔になる句をお待ちしています。優秀作品の20句は、トイレトペーパー型川

柳集としてTOTO出版より発行予定です。

ウェブ→
<https://jp.toto.com/knowledge/useful/senryu/top/>



B Book

TOTO出版のお知らせ

『HOLZ BAU [増補版]ホルツ・パウ—近代初期ドイツ木造建築』が2024年日本建築学会著作賞を受賞しました。本書は近代初期ドイツ木造建築の知られざる名作を日本の建築家がリサーチした、創造的探求の記録です。自費出版で発売後、即完売となった名著にアトリエ・ワン塚本由晴氏との新規鼎談を加えた増補版です。ぜひご覧ください。

HOLZ BAU [増補版]ホルツ・パウ —近代初期ドイツ 木造建築

Present!→

同封の
「TOTO通信アンケート」に
お答えいただいた方の中から、
抽選で10名の方に
プレゼントいたします。

| | |
|-------|-----------------------------------|
| 編集・企画 | 福島加津也、富永祥子、 本橋仁、佐脇礼二郎 |
| 定価 | 定価4,290円 (本体3,900円+税10%) |
| 体裁 | B5判変型(256×158mm)、 並製、392頁、和英併記 |
| 発行 | 2022年9月 |



2024年
日本建築学会
著作賞を
受賞

I Information

TOTO乃木坂ビル

東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル

| | |
|-------------------------------|---|
| 3F TOTOギャラリー・間 | 電話/03(3402)1010 定休日/月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始 入場料/無料 ※最新情報は、TOTOギャラリー・間ウェブサイト (https://jp.toto.com/galleria)をご参照ください。 |
| 2F Bookshop TOTO | 電話/03(3402)1525 定休日/月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・日曜日・夏期休暇・年末年始 ※詳細はBookshop TOTOウェブサイト (https://jp.toto.com/bookshoptoto)をご参照ください。 |
| 2F TOTO出版 | 電話/03(3402)7138 全国の書店でお求めください。 直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。 ※最新情報は、TOTO出版ウェブサイト (https://jp.toto.com/publishing)をご参照ください。 |
| B1・1F セラトレーディング | 電話/03(3402)7134(東京ショールーム) 定休日/月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始 ※事前予約制。ご予約・展示品のご案内はウェブサイト (https://www.cera.co.jp/showroom)をご参照ください。 |

アクセス

- 東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分
- 都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車8番出口徒歩6分
- 東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車4a番出口徒歩7分
- 東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車4番出口徒歩7分



C Cera

セラトレーディングのお知らせ

ドイツ・VILLEROY & BOCH社の 洗面器「LOOP & FRIENDS」 シリーズがデザインを アップデートしました

ベッセル型で人気の洗面器「LOOP & FRIENDS」シリーズが、デザインをアップデート。丸みを帯びたフォルムはそのままに、リムが薄くなり、親しみやすさのなかにも気品が感じられるデザインとなりました。正円・楕円・長方形を基調とした展開で、間口やスタイルに合わせて選んでいただくことができます。またボウルと一体感の高まる陶器製排水ヘッド部も用意。ワンランク上の水まわり空間の計画に、ぜひご検討ください。



LOOP & FRIENDS シリーズ
洗面器 VB4A4800
希望小売価格 135,000円(税別)

当商品を掲載した「Additional Collections 2024」はウェブサイトよりご請求・閲覧ください。
※総合カタログをご請求いただけますと自動添付されます。

ウェブ→
<https://www.cera.co.jp/catalogue>



次号『TOTO通信』は2025年1月発行の予定です。



THE CRASSO

ザ・クラッソ



SYNLA

シンラ



ESCUA

エスクア



NEOREST

ネオレスト

水まわり嬉しい

キッチンがあかると、
浴室がきもちいいと、
洗面所が使い心地いいと、
トイレがいつもクリーンだと、
ひとは嬉しいものですね。
TOTO はかなえたい。
あなたの、水まわり嬉しいを。

商品のお問い合わせは TOTO お客様相談室 ☎ 0120-03-1010
受付時間 9:00～17:00（夏期休暇・年末年始・当社所定の休日等を除く）

東陶屋キャンペーンサイト
<https://jp.toto.com/pages/knowledge/campaign/totoya>



『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客様さまNo.（封筒の宛て名ラベル右上に記載）も併せて下記までご連絡ください。

TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999

*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客様からお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(<https://jp.toto.com>)をご覧ください。